



指標でみる過去と現在

びわ湖と暮らし 2018



～今年のテーマ～

「まる まる」

から見た
びわ湖

あなたに見えるびわ湖、
わたしに見えるびわ湖。
…同じかな？ 違うかな？



T

able of Contents

目次

A bout this Report – このレポートについて –	2
H ow to Evaluate Indicators – 指標の評価方法について –	3
R esult of Evaluation – 評価結果 –	4
I ndicators of the Lake – 湖内の指標 –	6
琵琶湖の水の清らかさ	7
琵琶湖の植物プランクトン	9
琵琶湖漁業の漁獲量（魚類等）	10
琵琶湖の底質	12
I ndicators of the Lakeshore – 湖辺域の指標 –	14
琵琶湖の水草（主に沈水植物）	15
琵琶湖のヨシ	16
琵琶湖漁業の漁獲量（貝類）	17
希少野生生物種	18
I ndicators of the Watershed and Our Life – 集水域・暮らしの指標 – ...	19
河川の水質	20
一次産業（就業者数・生産額）	21
環境と調和した農業	22
森林の状況	25
R elationship between Indicators – 指標間の関係性 –	27
平成 29 年度に琵琶湖で生じた主な事象間の関係性	28
平成 29 年度の琵琶湖における物質収支の概況	30
琵琶湖とその流域で生じた主な事象の年表	34
指標一覧および関係性の全体像	36

About this Report

このレポートについて

琵琶湖は単に水をたたえる「水瓶」としてそこにあるのではなく、数多くの生きものが生息し、また私たちが日々その恩恵を受けて生活をしています。琵琶湖の水、生きもの、私たちの暮らしは密接につながり、影響し合いながら存在しており、どれか一つの側面だけをもって琵琶湖の状態を評価することはできません。しかしこれまで、琵琶湖の水質はどうか、魚はどうか、森林はどうかといったように、個別に評価されることが普通で、**全体を見て一体どこに根本的な問題があるのか、どこから手を付ければよいのかなどを話し合う機会やそのための資料はほとんどありませんでした。**

平成 23 年度（2011 年度）に策定された「マザーレイク 21 計画（第 2 期改定版）」では、2020 年の計画目標として「琵琶湖流域生態系の保全・再生」と「暮らしと湖の関わりの再生」を掲げています。計画の進行管理を行うための指標として、施策の進捗状況を表す指標（アウトプット指標）、および環境や社会の状態を表す指標（アウトカム指標）を設定し、これにより目標の達成の度合いを管理していくこととしています。

本レポート「琵琶湖と暮らし 指標でみる過去と現在 (State of the Lake Biwa and Our Life)」は、このうちアウトカム指標に着目し、**いま、琵琶湖とそれを取り巻く私たちの暮らしがどのような状態にあるのか？これまでどのような経緯をたどってきたのか？**を端的に理解するための資料として、マザーレイクフォーラム¹で設置される「学術フォーラム²」および「びわコミ会議³」の開催に合わせ、最近のデータを取り入れ、毎年、作成しています。このレポートが多様な主体同士の話し合いの一助になれば幸いです。

なお本レポートは、平成 30 年 8 月 26 日に開催する「第 8 回マザーレイクフォーラムびわコミ会議 2018」のテーマ「〇〇（まるまる）から見たびわ湖」を共有しており、テーマに関連する市民、企業らの取組の事例を「関連情報・取組」として掲載しています。



「びわコミ会議」の様子（話し合いを受けて「私のコミットメント（約束）」を提示）

¹琵琶湖流域に関わる様々な主体が、お互いの立場や経験、意見の違いを尊重しつつ、思いや課題を共有し、琵琶湖の将来のために話し合うとともに、マザーレイク 21 計画の進行管理の一部を担い、評価・提言を行う場です。

²琵琶湖の生態系と流域に住む人々の暮らしの健全性について、専門家の視点から様々な指標を個別に見ていただくのと同時に、総合的に見て一定の評価を行う場です。びわコミ会議に先立って開催しています。

³びわコミ会議は、マザーレイクフォーラム運営委員会で設定されたテーマに基づき、多様な主体が一同に会する場として 1 年に 1 回開催しています（写真は第 4 回（2014 年 8 月 23 日）の様子）。



How to Evaluate Indicators

指標の評価方法について

本レポートでは、マザーレイク 21 計画に挙げられた全 128 指標のうち、①環境や社会の状態を表す指標（アウトカム指標）⁴であること、②経年変化が把握できること、③計画に掲げられた 2020 年度（平成 32 年度）の目標との関連が深いこと、という 3 つの視点から、琵琶湖と暮らしの健全性を評価する上で「鍵となる指標」の選定を行います。関連の深い指標はできるだけまとめ、カテゴリごとに評価します。

評価は、「いまだのような**状態**にあるのか」および「これまでの**傾向**はどうか」という 2 つの観点から行います。また必要に応じて北湖および南湖に区別します。

State – 状態 –

基本的に**指標値と目標値の比較**から、以下の 4 段階で評価します。



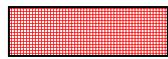
GOOD (よい)

目標値を達成している等、よい状態にあることを示す



FAIR (悪くはない)

目標値には達していないが、悪くはない状態にあることを示す



POOR (悪い)

目標値には遠く、悪い状態にあることを示す

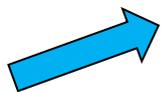


UNDETERMINED (評価できない)

データが不十分、見方により変わる等の理由で評価ができないことを示す

Trend – 傾向 –

基本的に**直近 20 年程度⁵（データがない場合はより短い期間）の指標値の傾向**から、以下の 4 段階で評価します。傾向が途中で変化している場合は、より近年のものを採用します。



IMPROVING (改善している)

経年的に改善傾向にあることを示す



UNCHANGING (変わらない)

経年的な傾向が明確には見られないことを示す



DETERIORATING (悪化している)

経年的に悪化傾向にあることを示す



UNDETERMINED (評価できない)

データが不十分、見方により変わる等の理由で評価ができないことを示す

⁴ 施策の進捗状況を表す指標（アウトプット指標）に関する情報は、適宜「関連情報」の欄で掲載します。

⁵ 琵琶湖水の大部分が入れ替わる期間が 20 年程度と言われており、環境が変化する一つの目安期間として設定しています。

Result of Evaluation

評価結果

「湖内」「湖辺域」「集水域・暮らし」における鍵となる指標を抽出し、後述の12のカテゴリに分類して評価を行いました。その結果をまとめたものが右の表です。北湖と南湖で評価が分かれる場合は、上下2段（上：北湖、下：南湖）に分けて評価を記入しています。

全体として見たとき、琵琶湖や河川の水質などの状況は改善傾向が見られ、状態としても悪くはないと考えられる一方で、在来魚介類の漁獲量や希少野生生物種、水草などは悪化傾向にあります。それを取り巻く私たちの暮らしも、改善が見られていることもあります。一方、一次産業は、情勢の変革の中で、従事者数が減少傾向にあり、自然と関わり生産を共にする暮らしづくりが少なくなりつつあります。別の側面から見れば、比較的対策のしやすい、あるいは対策の効果の現れやすいものについては、アウトカム（環境や社会の状態）としても結果が出ている一方で、そうでないものは依然として厳しい状況にあると言えます。

高度経済成長期以前は、十分なデータがなく、また概念的ではありますが、水は現状と同程度あるいはそれ以上に澄み、同時に在来の生きもので豊かな琵琶湖があったと考えられています。琵琶湖が富栄養化していた時代、水中にある過剰な窒素やリンの量を減らせば、同時に生きものにとってもよい環境になると考えられていました。確かに様々な取り組みにより、琵琶湖は富栄養な状態を脱することはできましたが、在来の生きものは戻ってくるどころかむしろ減少してきました。この原因ははっきりとは分かっておらず、外来魚の増加や生息環境の悪化などの直接的な影響の他、水質そのものが食物連鎖を通じて生きものに影響を与えている可能性もあります。赤潮は減少してきたものの、植物プランクトンの種類は大きく変化し、漁網に異常な汚れが付着するようになりました。底質についても、泥質化傾向を疑わせるデータが出てきています。いずれにせよ、琵琶湖は「生態系のバランスが崩れてきた」状態にあり、その解決のためには、より総合的な視野に基づくアプローチが求められます。



琵琶湖の環境変化の歴史と因果について話し合う

（「魚たちのにぎわいを協働で復活させるプロジェクト」（p.28 参照）より）



表 琵琶湖と暮らしに関わる「鍵となる指標」の評価結果

分類	指標 (カテゴリー)	State - 状態 -				Trend - 傾向 -			
		よい	悪くはない	悪い	評価できない	改善している	変わらない	悪化している	評価できない
湖内	琵琶湖の水の清らかさ		■						◇
	琵琶湖の植物プランクトン		■						◇
	琵琶湖漁業の漁獲量 (魚類等)			■				→	
	琵琶湖の底質	北湖			■		■	→	
	南湖						→		
湖辺域	琵琶湖の水草 (主に沈水植物)	北湖			■			→	◇
		南湖			■		→		
	琵琶湖のヨシ		■			→			
	琵琶湖漁業の漁獲量 (貝類)			■				→	
	希少野生生物種			■				→	
集水域・暮らし	河川の水質		■			→			
	一次産業 (就業者数・生産額)			■				→	
	環境と調和した農業		■			→			
	森林の状況		■						◇

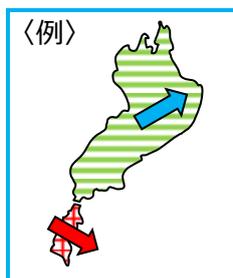
「State - 状態 -」の評価

	GOOD (よい) 目標値を達成している等、よい状態にあることを示す
	FAIR (悪くはない) 目標値には達していないが、悪くはない状態にあることを示す
	POOR (悪い) 目標値には遠く、悪い状態にあることを示す
	UNDETERMINED (評価できない) データが不十分、見方により変わる等の理由で評価ができないことを示す

「Trend - 傾向 -」の評価

	IMPROVING (改善している) 経年的に改善傾向にあることを示す
	UNCHANGING (変わらない) 経年的な傾向が明確には見られないことを示す
	DETERIORATING (悪化している) 経年的に悪化傾向にあることを示す
	UNDETERMINED (評価できない) データが不十分、見方により変わる等の理由で評価ができないことを示す

各指標 (カテゴリー) の評価の見方



次ページ以降に、各指標 (カテゴリー) の評価を左図のような形で北湖と南湖を分けて掲載しています。例えば左図の場合、評価結果は以下の通りとなります。

北湖：状態は悪くはなく、また傾向としても改善している

南湖：状態は悪く、また傾向としても悪化している



I ndicators of the Lake

湖内の指標

- ・琵琶湖の水質
- ・琵琶湖の植物プランクトン
- ・琵琶湖漁業の漁獲量（魚類等）
- ・琵琶湖の底質

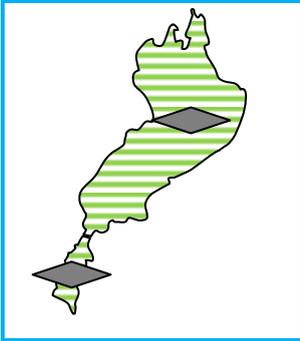
【2020 年度の目標】

良好な水質と栄養塩バランスの回復と、多様で豊かな在来生物群集の再生



琵琶湖の水の清らかさ

関連するアウトカム指標：琵琶湖の透明度、COD、T-N（全窒素）、T-P（全りん）、流入汚濁負荷推定量



生活環境項目の環境基準*として、COD（有機物による汚濁）、窒素、りん（富栄養化の観点）があります。植物プランクトンの生産に関わる全窒素および全りん等は環境基準に向けた改善傾向が見られますが、水の清らかさに関わる透明度やCODは近年複雑な傾向を示しており、必ずしも改善していません。環境基準は北湖の全りん等を除き達成できていません。

水草の大量繁茂、在来魚介類の減少等、生態系の課題が顕在化していることから、生態系保全も視野に入れた新たな水質管理を検討することが必要です。

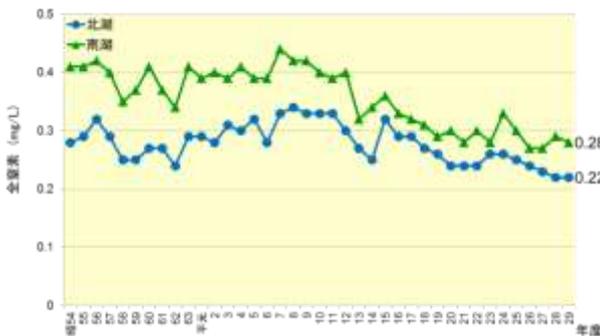


透明度

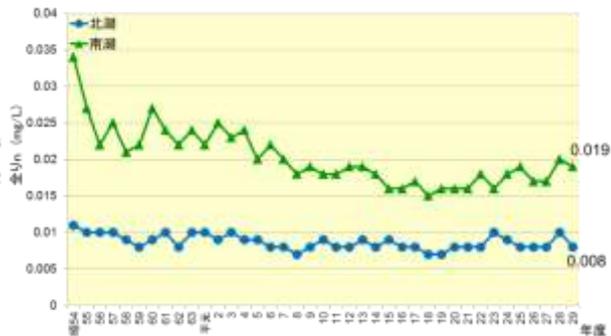


有機物 (COD)

【水の清らかさに影響を及ぼす指標】



全窒素 (T-N)



全りん (T-P)

データ：国土交通省近畿地方整備局琵琶湖河川事務所、水資源機構、滋賀県
※北湖 28 地点、南湖 19 地点の平均値

★ 関連情報

○ 「第7期琵琶湖に係る湖沼水質保全計画」について

琵琶湖の水質保全を図るため、滋賀県と京都府は湖沼水質保全特別措置法に基づき、平成 29 年 3 月に「第7期湖沼計画」を策定しました。この計画では5年後の水質目標値を定めることにより、計画的に水質保全対策を推進することとしています。

琵琶湖では生態系の課題が顕在化し、この一因として物質循環の様相が変化したことが考えられています。このことから、湖沼計画

においては、生態系保全も視野に入れた TOC 等による水質管理手法を検討することとしています。

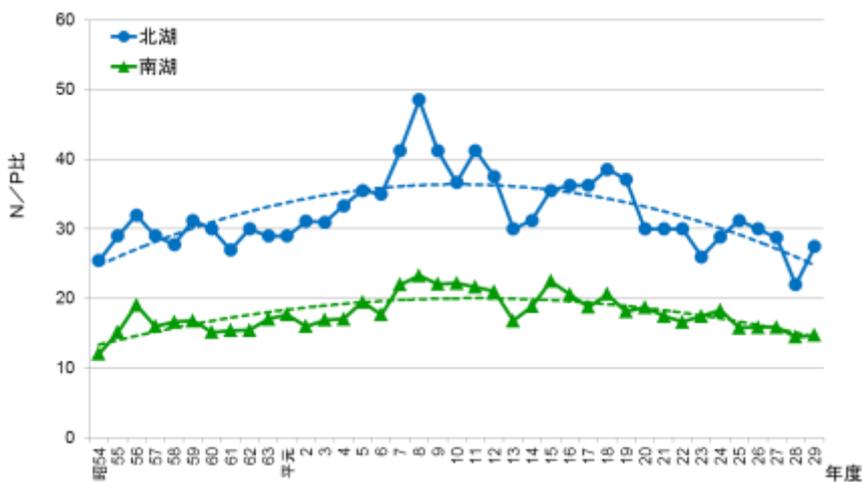


全有機炭素 (TOC)

*環境基準：河川や湖沼の水質保全を進めるための目標として、環境基本法に基づいて国等が定めているものです。環境基準には、「人の健康の保護に関する環境基準（健康項目）」と「生活保全に関する環境基準（生活環境項目）」があります。

★ 関連情報・取組

○富栄養化対策を進めると、一般に窒素よりもりんの方が削減されやすいため、窒素とりの濃度比(N/P比)が増加する傾向が見られます。この変化が植物プランクトンの群集組成などに影響する可能性も指摘されています。琵琶湖においては、近20年程度で見ると低下傾向にあり、昭和54年当初のレベルに戻りつつあります。しかしより長期に見ると依然高い状態にあるため、今後も注意して推移を見ていく必要があります。

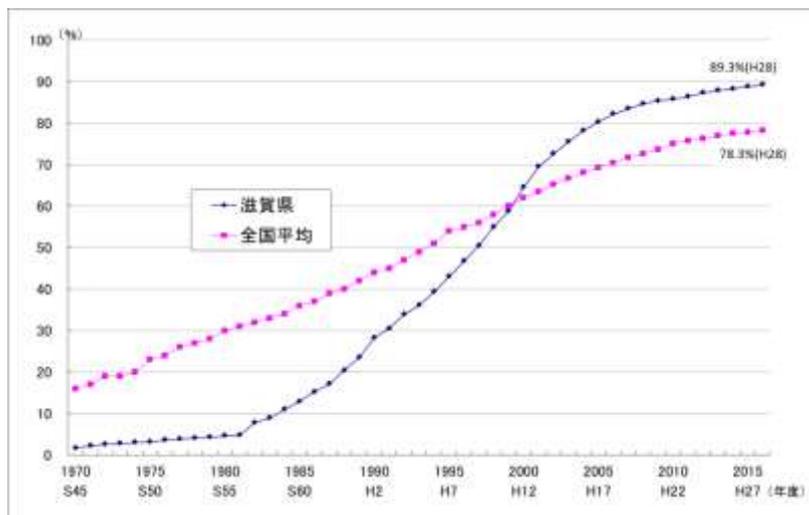


琵琶湖における窒素とりの濃度比の経年変化

○下水道の整備

琵琶湖を中心とする公共用水域の水質を保全するため、下水道整備に積極的に取り組んできました。閉鎖性水域である琵琶湖の富栄養化を防止するため、いずれの処理施設でも、窒素・りんの除去を目的とした高度処理を行っています。

こうした水質保全対策の結果、琵琶湖への流入汚濁負荷は、一定削減され、琵琶湖の富栄養化は抑制されてきました。



下水道普及率



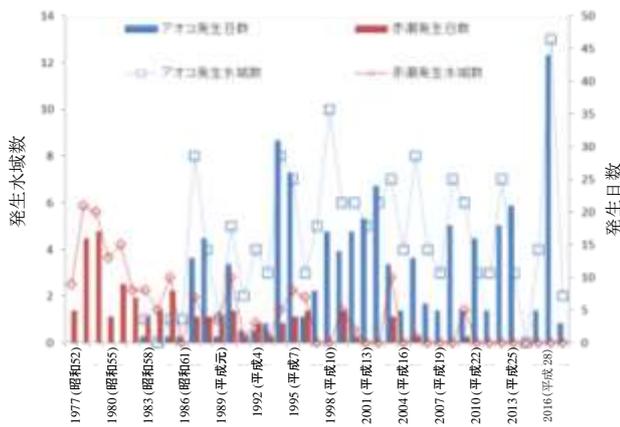
琵琶湖の植物プランクトン

関連するアウトカム指標：アオコの発生日数・水域数、淡水赤潮の発生日数・水域数、珪藻網が優先する比率

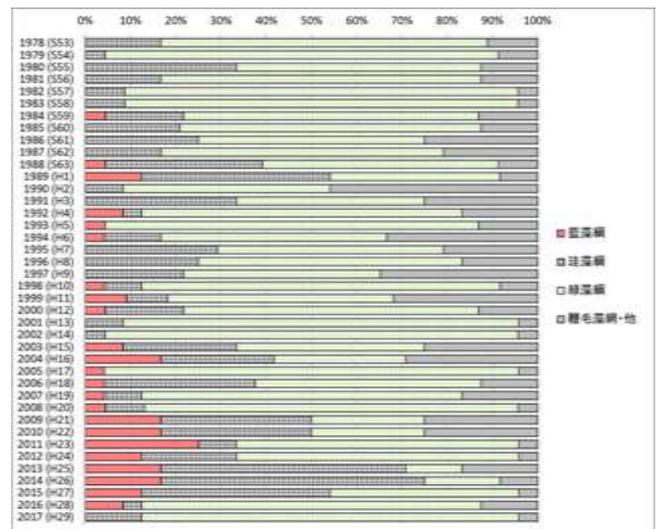


昭和 52 年に大発生した淡水赤潮はその後減少傾向にあり、平成 22 年以降発生数はゼロとなっています。一方で昭和 58 年に南湖で初めてアオコが発生し、平成 6 年には北湖でも発生するなど琵琶湖全域で見られるようになりましたが、平成 22 年度以降、北湖でアオコは確認されていません。平成 29 年は南湖 2 水域で 3 日発生し、このうち最初の発生は、これまでで最も早い時期（7 月 21 日）に確認されました。

植物プランクトンの種構成も変化してきており、特に近年は動物プランクトンに食べられにくいといわれる藍藻が増加する傾向にあります。また、かつては珪藻主体だったといわれていますが、昭和 50 年頃からは緑藻が主体になっています。なお、平成 25 年から 27 年は珪藻が主体でしたが、28 年、29 年は緑藻が主体となりました。

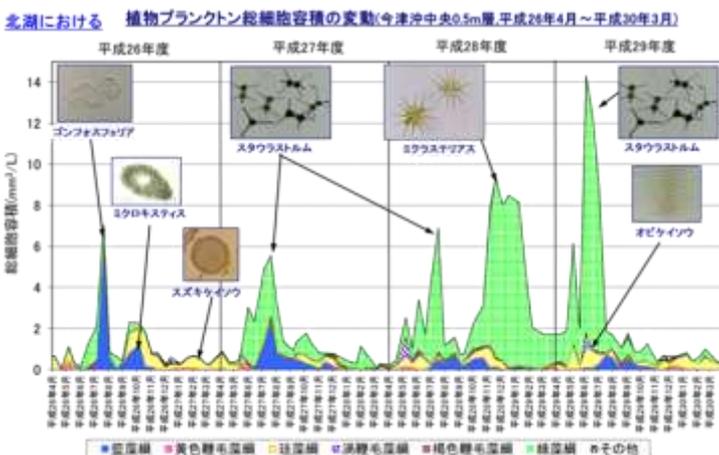


淡水赤潮・アオコの発生日数・水域数



植物プランクトンの種構成の変化

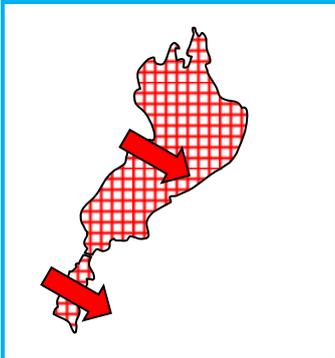
★ 関連情報



○昭和 55 年頃以降、植物プランクトン現存量は徐々に減少する傾向にありますが、年によっては植物プランクトンが大量増殖するなど激しく変動することがあります。平成 26 年、27 年には、年間を通して植物プランクトン現存量が低く推移しました。また、平成 28 年の秋から冬には大型緑藻ミクラスタツナスが増殖し、平成 29 年の春から夏には大型緑藻スタウラストルムが増殖しました。

琵琶湖漁業の漁獲量（魚類等）

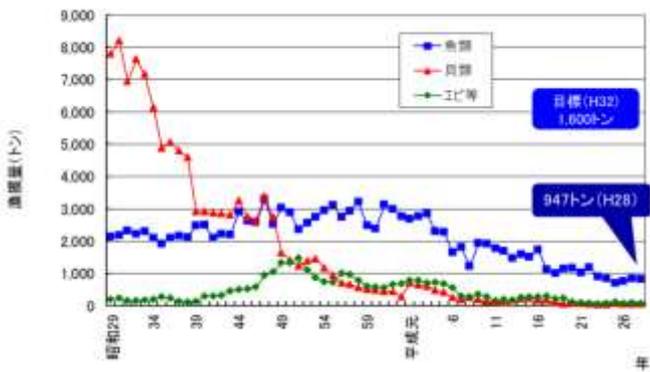
関連するアウトカム指標：琵琶湖漁業の漁獲量、ニゴロブナ・ホンモロコ・アユ・ビワマスの漁獲量、ニゴロブナ当歳魚資源尾数、外来魚生息量



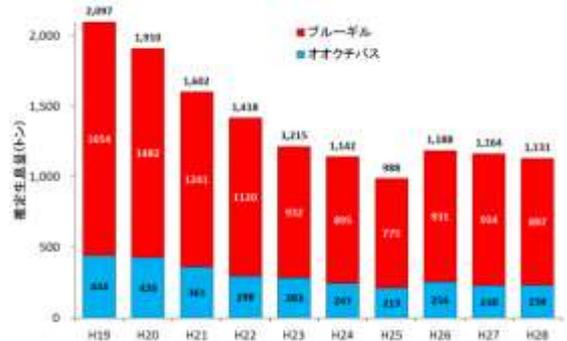
漁獲量は大きく減少しており、ホンモロコなどに増加の兆しがみられるものの、依然、低水準となっています。

傾向は魚種によって異なり、フナやホンモロコは、時期は違いますがあるときから急減し、一方ビワマスは経年的な減少傾向は見られていません。

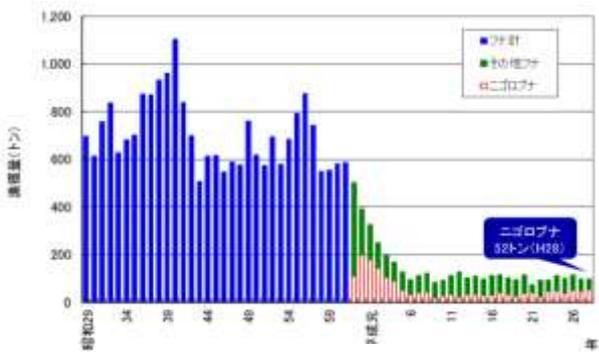
大增殖したオオクチバスやブルーギルなどの外来魚は、駆除やリリース禁止などの取組で生息量を着実に減少させてきましたが、平成25年を境に増加に転じています。



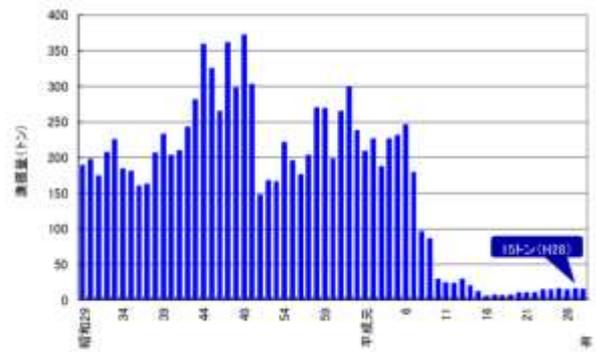
琵琶湖漁業の漁獲量（外来魚を除く）



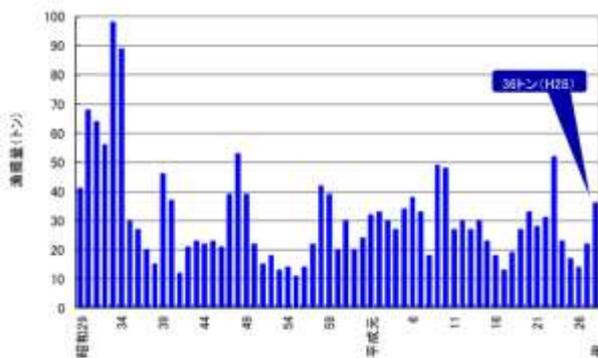
主な外来魚の推定生息量



フナの漁獲量



ホンモロコの漁獲量



ビワマスの漁獲量



ホンモロコ



★ 関連情報・取組

○琵琶湖での漁業再生の取組

「琵琶湖漁業再生ステップアップ」プロジェクト

在来魚介類資源の回復と漁業の再生を図るため、漁業者の皆さんと連携して、在来魚の産卵繁殖場・漁場としての最重要拠点である赤野井湾を含む南湖水域では水草除去や外来魚駆除、種苗放流による在来魚介類資源の回復、漁場の再生を図り、また、北湖水域では産卵繁殖場の機能改善による天然水産資源の増大を図り、滋賀県農業・水産業基本計画の目標とする H32 年の外来魚を除く琵琶湖漁業の漁獲量 1,600 トンの達成を目指します。

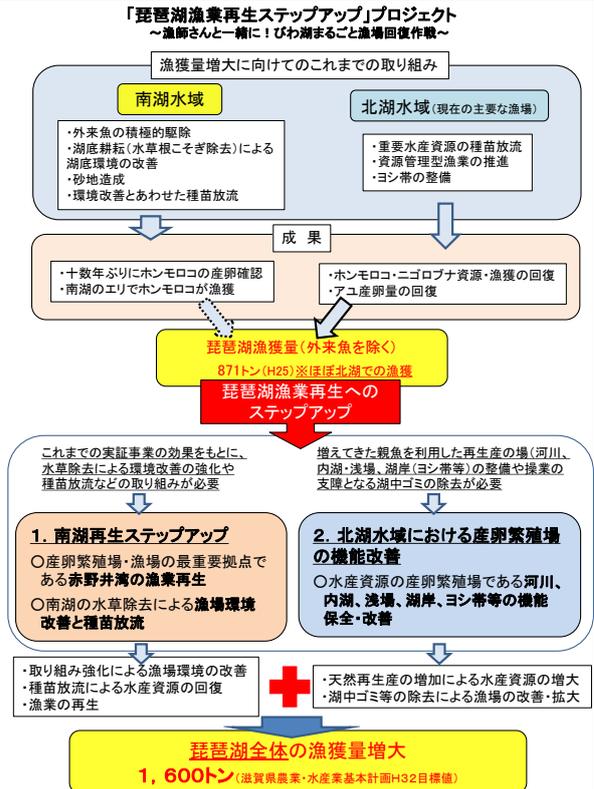
○『琵琶湖八珍』は、ほんにすごい！

「琵琶湖八珍」をご存知ですか？ 日本一の大きさと歴史を誇るびわ湖では、「ここでしか獲れない」、「他では味わえない」数多くの魚たちが育まれています。そんな魅力がたっぷりつまった魚たちのなかでも、特にびわ湖を代表する魚たちが『琵琶湖八珍』として選ばれています。

ビワマス、コアユ、ハス、ホンモロコ、ニゴロブナ、スジエビ、ゴリ（ウロリ、ヨシノボリ）、イサザの8種類の魚たちで、それぞれの頭文字から「ビ・ワ・コ・ハ・ホン・ニ・ス・ゴ・イ」＝「びわ湖はほんにすごい！」と覚えてみてください。

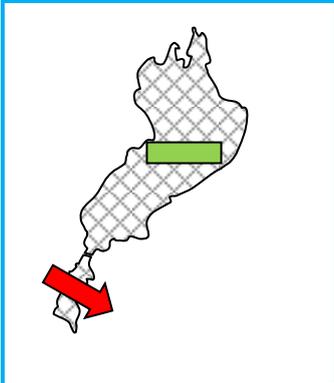
この『琵琶湖八珍』のなかの一つである“びわ湖の宝石”とも称されるビワマスが、全国的に注目を浴びた大きな出来事がありました。平成 28 年 11 月 20 日に東京日比谷公園にて開催された「第 4 回 Fish-1 グランプリ・プライドフィッシュ料理コンテスト」において、全国の漁連・漁協から応募された数多くの料理のなかから、滋賀県漁業協同組合連合青年会による『天然ビワマスの親子丼』が見事グランプリを獲得しました！今年も、秋以降になると、皆様のお目にかかることができます。

琵琶湖の魚を使った料理を楽しむことは、湖魚の消費拡大による琵琶湖漁業の振興につながります。ぜひ、ご賞味ください。



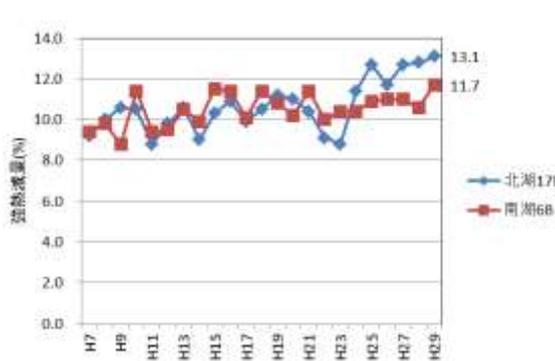
琵琶湖の底質

関連するアウトカム指標：琵琶湖の底質調査（強熱減量）

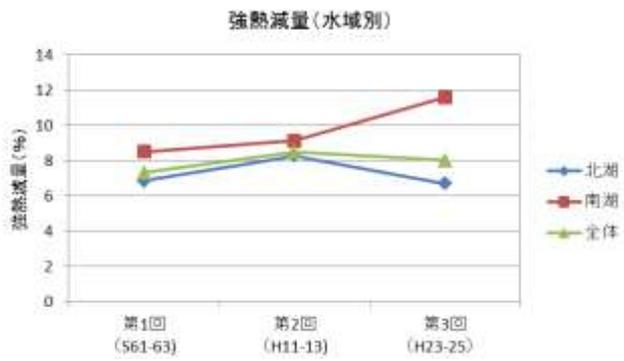


琵琶湖では毎年11月に北湖1地点、南湖1地点における底質の調査を実施しています。また多地点における底質調査を、10年に1回程度の頻度で、これまでに3回行っています。

調査項目のうち「強熱減量*」は、底質中の有機物量の指標の一つであり、泥質の状態を表す一つの目安にもなります。毎年の定期調査では北湖、南湖ともにわずかに増加傾向が見られています。一方10年に1回程度の多地点調査では、昭和60年代と比較すると、北湖では横ばいですが、南湖で増加傾向にあることが分かります。



湖心部における底質の強熱減量（毎年）



湖内11地点における底質の強熱減量（約10年毎）

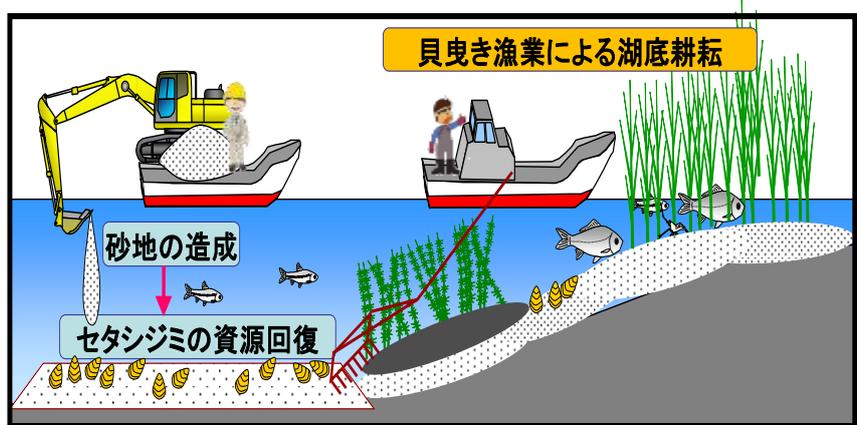
★ 関連情報・取組

○砂地造成事業

セタシジミ漁場である南湖の砂地は昭和44年頃の約719haから平成元年には151haまで減少しました。そのため、平成30年度までに68haの砂地を造成し、湖底の耕耘(120ha)、残存砂地(151ha)と合わせて339ha(昭和44年の約半分)の砂地・砂泥地を確保することを目標として事業を行っています。

平成19～平成29年度までに63.3haの砂地を造成しました。

また、シジミ資源の培養のため、砂地造成区域にセタシジミの稚貝を放流しています。



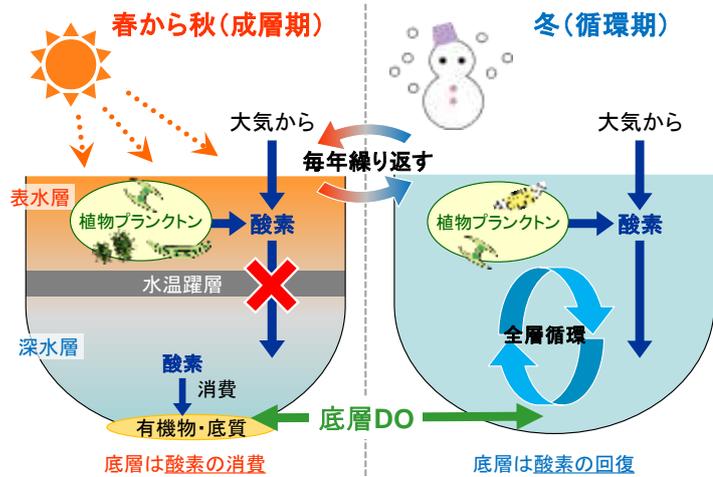
*強熱減量：土壌を乾燥・強熱したときに減少する質量の比率を表したもので、大部分は有機物です。値が大きいほど土壌に含まれる有機物量が多いと考えられるため、泥質状態を表す一つの目安となります。



★ 関連情報・取組

○底層の溶存酸素濃度（底層 DO）

琵琶湖では、春から夏にかけて、表層付近の湖水は水温の上昇により比重が軽くなり、湖底付近の水温が低く比重が重い層との間に、水の混合がなくなる「水温躍層（やくそう）」が形成されます。表層付近では植物プランクトンが光合成を行って酸素を放出しますが、深水層では沈降してきた植物プランクトンなどの有機物がバクテリアによって分解され、溶存酸素（DO）が消費されていきます。

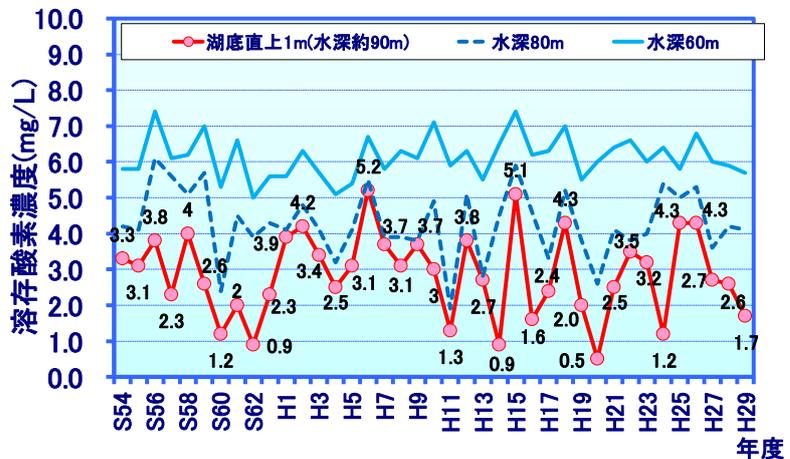


晩秋から冬にかけて、表層の水温が低下してくると比重が重くなり、湖水の循環混合が進みます。湖底の水温と表層の水温が同じになると、湖水が鉛直方向に十分に混ざる「全層循環」がおり、底層部の DO（底層 DO）が回復します。琵琶湖では、これらの現象が毎年繰り返されています。

底層 DO の値は、①物理的な混合による表層からの酸素供給、および②底層における有機物の分解等による酸素消費、によって決まります。①については、酸素を多く含む表層水が冬季に冷やされて湖底まで運ばれたり、台風によって湖底付近の湖水が攪乱されて少し上の湖水と混ざったりすることが考えられます。②については、陸域から流入した有機物の分解、表層で植物プランクトン等によって生産された有機物の分解、および底質中の還元物質による酸化が関与します。前ページで掲載した底質の指標（強熱減量）は、この②による酸素消費に関係する一指標となります。

底層 DO はそこに住む生物にとって極めて重要で、海洋生物での調査によると、比較的低酸素に強い貝類を除くと、DO が約 4mg/L 以下になると生物に何らかの影響が出てくると考えられています。とくに 2mg/L 以下になることを「貧酸素（状態）」と呼ぶことがあり、多くの生物への影響が懸念されます。平成 27 年度には底層 DO が水質汚濁に係る環境基準に追加され、琵琶湖でも基準値の検討が進められています。

右に、北湖今津沖中央の底層 DO の年度最低値の変動を示します。平成 11 年度頃を境に、DO が 2mg/L を下回る貧酸素状態の確認される年の頻度が増えています。この原因は定かではありませんが、台風の襲来が無い年や、植物プランクトンが大量に増殖して有機物の供給が増える年があることなどが考えられます。また今後、温暖化に伴い貧酸素化が



進行することも危惧されます。平成 29 年度は最低値 1.7mg/L を観測しましたが、これは春から夏にかけて大型緑藻が増加し、それが湖底に沈降して酸素消費を促進したことが主な原因と推測されています（後述「平成 29 年度に琵琶湖で生じた事象間の関係性」参照）。



I ndicators of the Lakeshore

湖辺域の指標

- ・琵琶湖の水草（主に沈水植物）
- ・琵琶湖のヨシ
- ・琵琶湖漁業の漁獲量（貝類）
- ・希少野生生物種

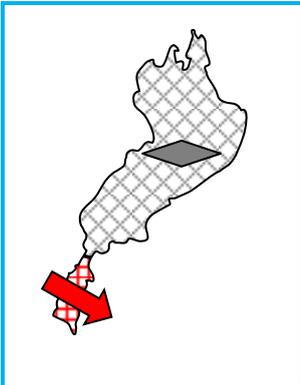
【2020 年度の目標】

絶滅に瀕する在来種の種数と外来種の減少、在来魚介類の再生産の回復と漁獲量の増加、湖岸景観の回復



琵琶湖の水草（主に沈水植物）

関連するアウトカム指標：水草群落面積

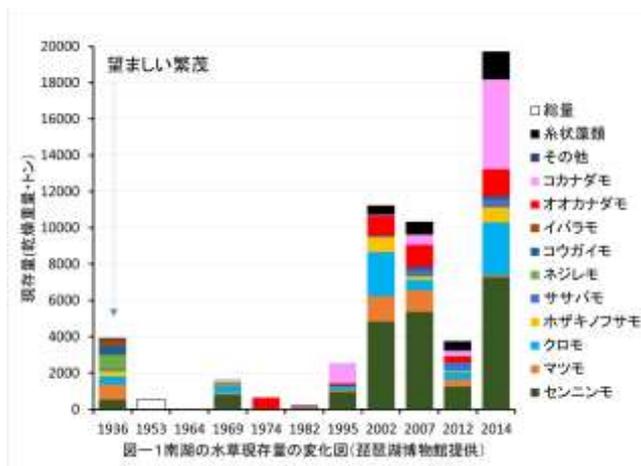


水草帯は、魚類の産卵や生息場所として、また鳥類の餌となるなど琵琶湖の生態系を形づくる重要な構成要素です。

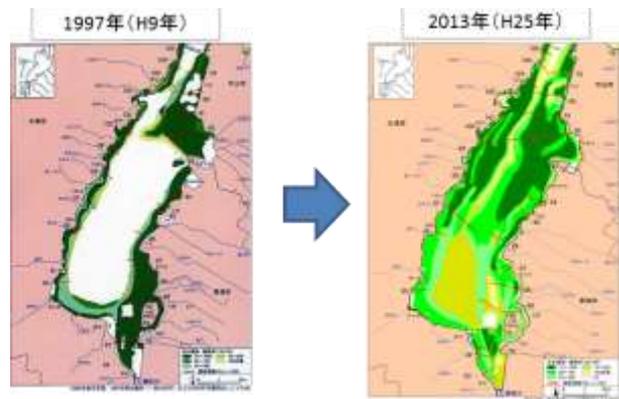
しかし、平成6年の大湯水以降、南湖における水草の増加が著しく、夏になると湖底の約9割（45 km²）を水草が覆う状況にあります。

このため、湖流の停滞、湖底の泥化の進行、溶存酸素濃度の低下など、自然環境や生態系に深刻な影響を与えています。

また、漁業や船舶航行の障害、腐敗に伴う悪臭の発生など生活環境にも悪影響があります。



南湖における水草現存量の経年変化



水草繁茂状況の変化

★ 関連情報・取組

○刈り取り等施策の状況

水面近くの水草は、本県が所有する水草刈取船を用いた表層刈取を実施するとともに、漁船と貝曳漁具を用いた根こそぎ除去に取り組んでいます。



↑ 水草刈取状況



↑ 根こそぎ除去状況

○刈り取った水草の有効利用（たい肥化）

刈り取った水草は、たい肥化を行うなど、かつてのように農地での有効利用をすすめています。



↑ たい肥化作業

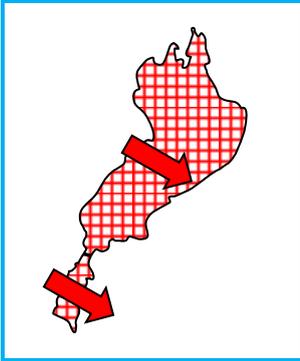


↑ たい肥の配布状況



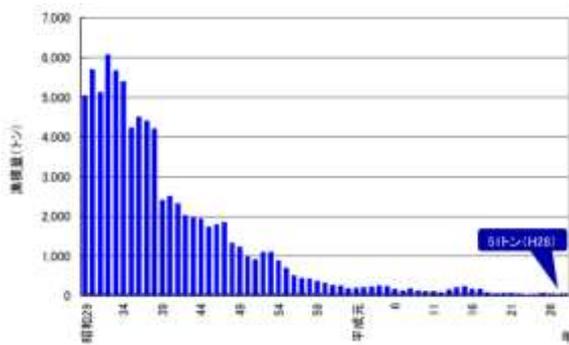
琵琶湖漁業の漁獲量（貝類）

関連するアウトカム指標：セタシジミの漁獲量、セタシジミの主要漁場における生息密度の推移

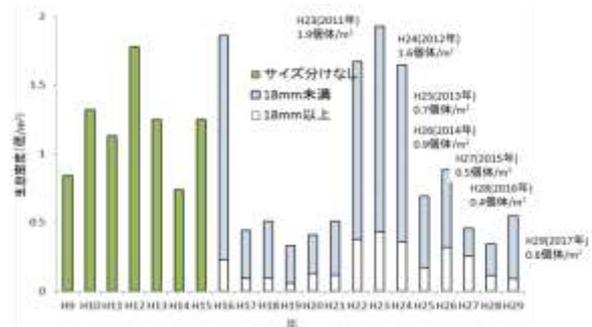


セタシジミの漁獲量は、かつて琵琶湖で 5,000 トン以上ありましたが、漁場環境の悪化などによって、近年 100 トン以下で低迷しています。

また、主要漁場の生息密度も昭和 24 年の 60 個体/m²から平成 29 年の 0.6 個体/m²と減少しています。



セタシジミの漁獲量の推移



セタシジミ主要 7 漁場における生息密度の推移

★ 関連情報・取組

○セタシジミ資源復活のための取組

現在、漁業が行われている北湖においては、資源管理型漁業の推進（漁業者による自主的な漁獲サイズの制限）や、天然の生産力を活用して稚貝の生残、成長に有効な好適環境を作り出す技術の開発などに取り組んでいます。

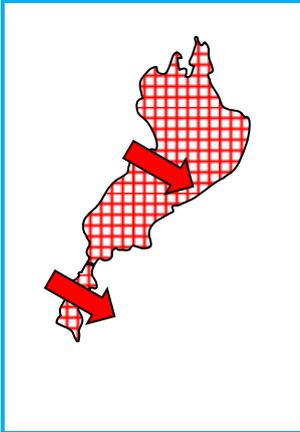
かつて主要漁場であった南湖においては、砂地造成、湖底耕耘などの湖底環境改善や種苗放流を実施して、漁場再生への取組を推進しています。

これらの取組により琵琶湖や瀬田川でのセタシジミ資源の復活を目指します。



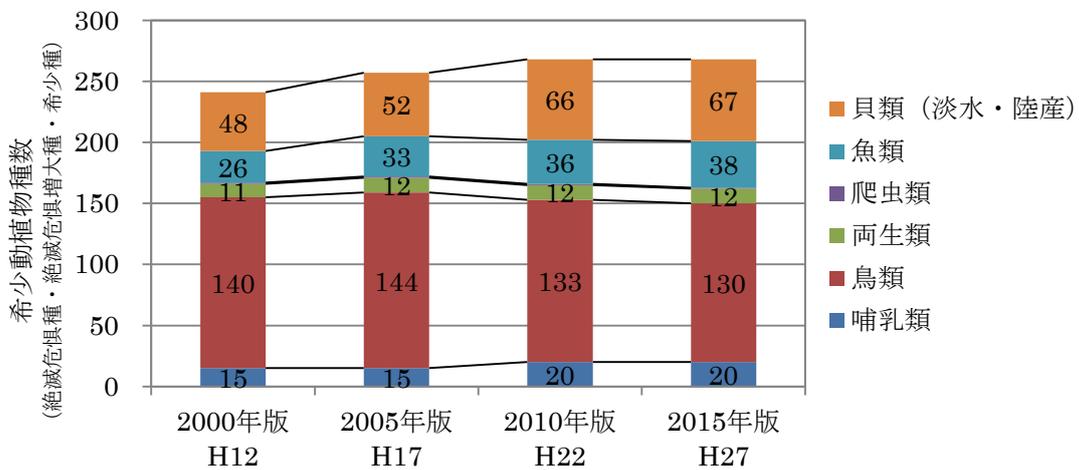
希少野生生物種

関連するアウトカム指標：希少野生脊椎動物種・貝類

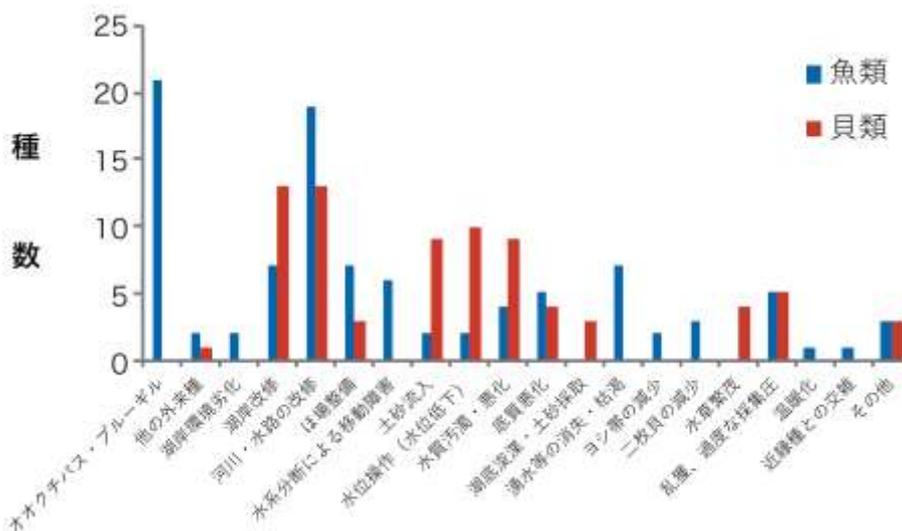


滋賀県レッドデータブックに掲載される希少野生動物種（「絶滅危惧種」「絶滅危機増大種」「希少種」の категорияに評価される種）の数は増加傾向にあり、滋賀県における野生動物の生息状況が悪化しつつあると考えられます。

希少野生動物種数の滋賀県内の在来種数に対する比率は、魚類で 58%、淡水貝類で 47%と高い値を示しています。また、琵琶湖固有種に対する比率は、魚類で 84%、淡水貝類で 64%とさらに高い値を示し、琵琶湖の魚類・貝類の置かれている現状が好ましい状態にはないことを示唆しています。このような生物多様性の危機をもたらした主な脅威として、例えば在来魚類については、外来魚や河川改修、湖岸改修、ほ場整備などが指摘されています。



滋賀県レッドデータブックで掲載された希少動物種数



滋賀県の魚類・貝類の絶滅危惧種、絶滅危機増大種、希少種の生存に対する脅威 (2015年版レッドデータブックより作図) (西野、2018)



I

ndicators of the Watershed and Our Life

集水域・暮らしの指標

- ・ 河川の水質
- ・ 一次産業（就業者数・生産額）
- ・ 環境と調和した農業
- ・ 森林の状況
- ・ 【参考】琵琶湖を活用した観光・レジャーの状況

【2020 年度の目標】

（集水域）適切に管理された森林や生物多様性に配慮した農地の増加と在来生物の回復

（個人・家庭）身近な水環境と親しみ、自らのライフスタイルを見直していく人の増加

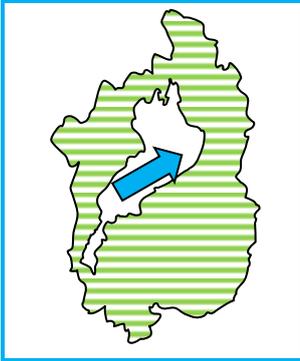
（生業）琵琶湖流域保全と調和した生業の活性化と、企業による地域の環境や文化の保全・再生活動の活発化

（地域）地域固有の環境、文化や歴史の再評価と、それらを保全する活動や取り組みの活発化

（つながり）湖内・湖辺域・集水域を行き来する在来生物の増加、地域を越えた活動のための仕組みづくりと普段の生活の中での湖との関わりの定着

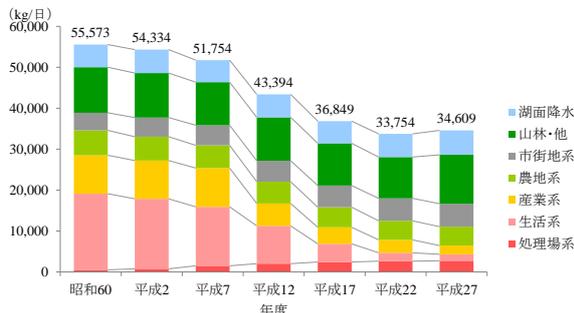
河川の水質

関連するアウトカム指標：県内主要河川の水質目標の達成率、県内河川の水質、流入汚濁負荷推定量



下水道の整備や排水の規制、環境こだわり農業の普及等、発生する汚濁物質を削減する対策を中心に進めてきた結果、琵琶湖に流入する汚濁物質の量は低減されていると考えられています。

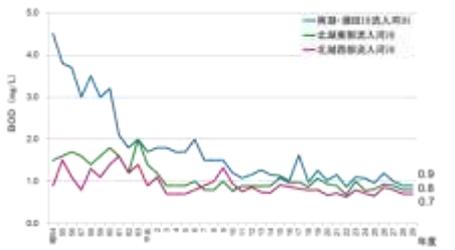
河川の水質についても経年的に改善または横ばい傾向となっています。河川の水質環境基準の達成率（BOD の環境基準を達成した河川数÷全 24 河川）は、平成 29 年度は 96%となっています。



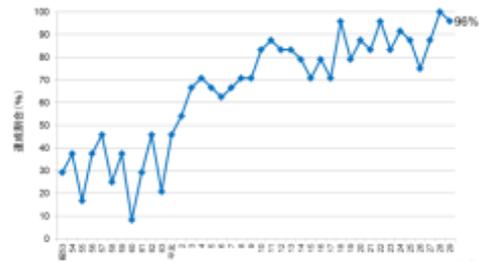
COD 流入負荷量の経年変化

注)

- ・平成 23 年度から平成 27 年度の 5 力年は、降雨の影響により流量が多かったため、山林・他の負荷量が増加したと分析。
- ・湖面降水以外の負荷量は、【発生】負荷量と同義であるため、河川の水質に直接影響すると考えられる。



県内主要河川の BOD の経年変化



県内河川の水質環境基準 (BOD) の達成率

★ 関連情報・取組

○琵琶湖・淀川上下流の交流を通じて相互理解を（琵琶湖・淀川流域圏連携交流会）

私達は、琵琶湖・淀川流域圏で活動している様々な団体や個人をゆるくつなぐ活動を通して、相互理解を深め、利害の対立を共通の課題へと高め、また、住民・住民組織や行政等と互いの枠を越え協働、連携することを目指しています。2005 年 3 月末に国で策定された「琵琶湖・淀川流域圏の再生計画」を行政と民間、市民が連携して進めるべく、市民側の窓口組織として 2006 年 10 月に設立した団体です。

流域圏をつなぐ活動を意識して、カヌーで木津川や桂川から淀川を大阪市内の桜宮公園まで下る、カヌーでつなぐ「琵琶湖・淀川流域圏」活動や、流域の河川整備等を知る現地リレー見学会などを行っています。

また、河川協力団体として 2016 年 1 月に国から指定されましたが、流域圏の他の河川協力団体をつなぐ活動にも取り組んでいます。

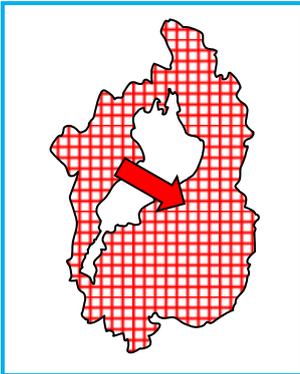


カヌーでつなぐ「琵琶湖・淀川流域圏」の様子



一次産業（就業者数・生産額）

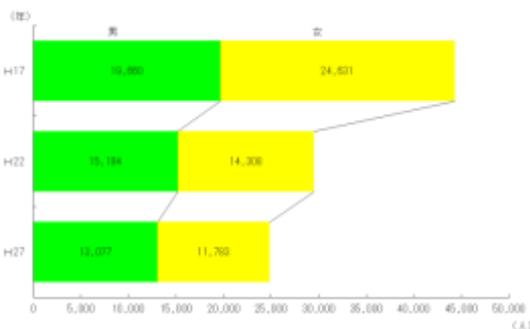
関連するアウトカム指標：漁業就業者数、琵琶湖漁業の生産額、農業就業人口（販売農家）、農業産出額、林業就業者数、林業産出額



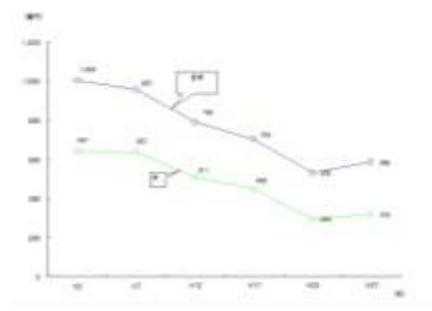
農業就業人口は、担い手への農地集積が進み、年々減少しています。農業産出額は、産出額に占める米の割合が高いことから、米価の低迷の影響を受け減少傾向にあります。近年、野菜等の園芸品目の生産が拡大しつつあります。

林業従事者数は、年々減少しているものの、琵琶湖森林づくり条例の基本理念に基づき、水源林保全を県民の主体的な参画により支えていく形態が増加しています。林業産出額は、主力となる素材生産量は増加傾向にあるものの、木材価格の下落等により減少傾向にあります。

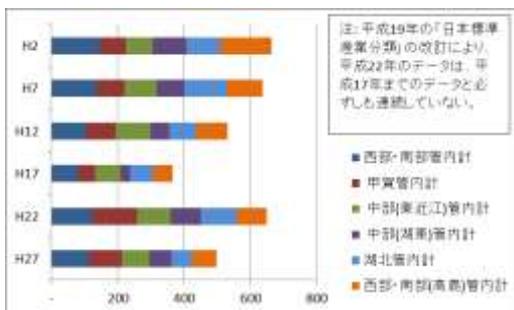
漁業就業者数は、昭和50年代以降、大きく減少しています。琵琶湖漁業の生産額は、漁獲量の減少等により、平成5年頃から大きく減少しています。



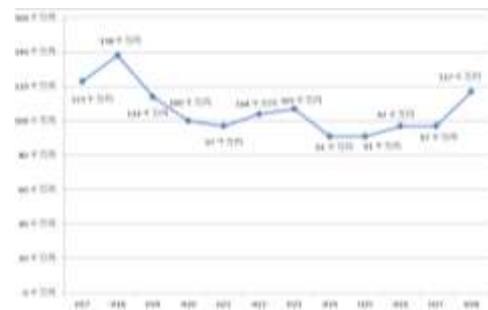
農業就業人口（販売農家）



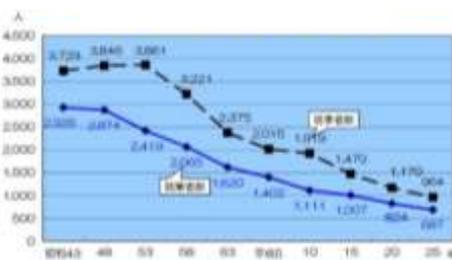
農業産出額



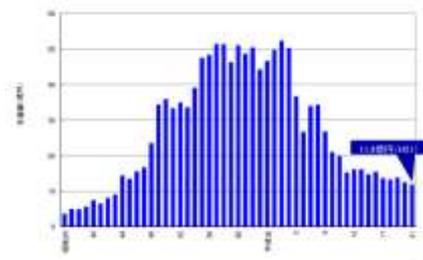
林業就業人数



林業産出額



漁業就業者数・従事者数



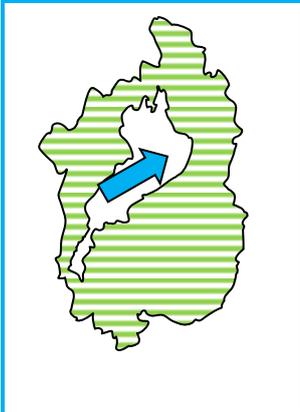
琵琶湖漁業の生産額

★ 関連情報・取組

- 青年農業者等育成確保推進事業：次代の滋賀県農業を担う新規就農者の確保・定着を図るべく、就農希望者の相談に応え、就農前相談から就農定着に至るまでを一貫して支援します。
- 漁師と一緒に琵琶湖の恵みを食べようプロジェクト事業：体験漁業や調理実習、レシピ本の配布などを通じて青年漁業者の情報発信力や販売技術の向上を図ります。

環境と調和した農業

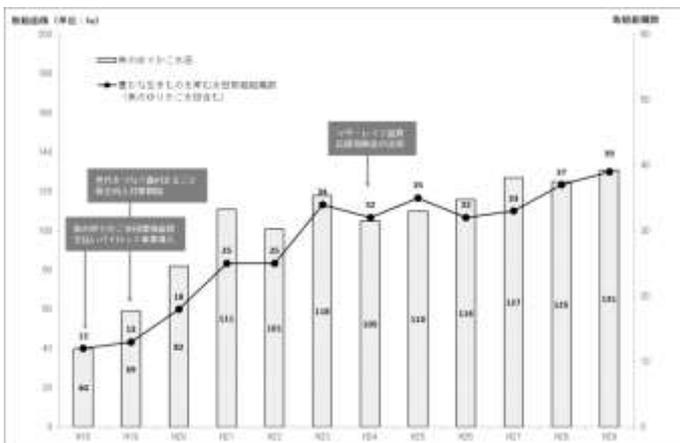
関連するアウトカム指標：化学合成農薬の使用量



より安全で安心な農産物を消費者に供給するとともに、琵琶湖をはじめとする環境と調和のとれた農業生産を確保するため、農薬と化学肥料の使用量を削減し、農業濁水の流出を防止するなど環境に配慮する「環境こだわり農業」を推進しています。さらに、平成 23 年度からは国の制度の活用により、地球温暖化防止や生物多様性に配慮した生産技術を付加して推進しています。ただ、環境こだわり農産物の栽培面積は増加してきたものの、近年伸び悩んでいる状況です。栽培面積の増加に連動し、県内の化学合成農薬の使用量は大幅に減少してきています。水田と周辺環境の連続性（生きものの移動経路）や生きものの生息空間を確保するための取組として、「魚のゆりかご水田」など豊かな生きものを育む水田づくりを進めており、取組面積が広がってきています。



環境こだわり農産物栽培面積と環境こだわり米作付比率の推移



豊かな生きものを育む水田づくり



魚道を勢いよく遡上するコイ



★ 関連情報・取組

○近江米「みずかがみ」が3年連続最高ランク「特A」評価

本県が育成した水稻品種「みずかがみ」は、夏の高温に強く良食味の品種で、環境こだわり農産物の基準に沿った栽培が行われており、生産されるお米すべてが環境こだわり農産物の認証を受けています。本格的な栽培を開始した平成25年産以降、作付面積は着実に増え、平成30年産は約2,751haで作付けが行われています(H30.7月時点)。さらに、平成29年産米の食味ランキングでは、3年連続最高ランクの「特A」に評価されました。環境こだわり農産物限定の「みずかがみ」が、最高の評価を受けたことで、環境こだわり農産物の生産拡大に期待が広がります。



○「琵琶湖と共生してきた滋賀の農林水産業」を「世界農業遺産」に！

皆さんは「世界農業遺産プロジェクト」を御存じですか？このプロジェクトは、伝統的な琵琶湖漁業や、琵琶湖から湖魚がやってきて産卵・繁殖する「魚のゆりかご水田」、米と湖魚が融合した食文化「鮒ずし」や、琵琶湖の水質や生態系の保全に寄与する農業・水源林保全など、滋賀の風土と歴史の中で育まれてきた「琵琶湖と共生する農林水産業」を世界に誇るべき「琵琶湖システム」として発信し、「世界農業遺産」として国連食糧農業機関(FAO)の認定を目指す取組です。

認定申請に向け、平成30年3月には、「琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会」が設立されました。行政だけでなく、生産者・消費者・企業の皆さん、次世代を担う若い方々とともに、滋賀の農山漁村の魅力発信などに取り組んでいます。活動の輪をさらに広げていくため、さらに多くの皆さんにも協議会への参画を呼びかけています。詳しくは県農政課HPを御覧ください。

「琵琶湖と共生してきた滋賀の農林水産業システム」のイメージ

滋賀県 世界農業遺産 🔍 検索

会員大募集！

年会費 参加費 無料

琵琶湖と共生する活動のネットワークを広げよう

滋賀の農林水産業を次世代へ継承しよう

みんなで道賀から世界農業遺産を創ろう

琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会

○魚のゆりかご水田とは？

滋賀県では、排水路に設置した魚道をとって田んぼにのぼったニゴロブナなどの在来魚が、田んぼで産卵・繁殖している状況を確認するとともに、農薬・化学肥料を通常の50%以下に減らして栽培する環境こだわり農業を実践し、かつ、除草剤を使用する場合は、水産動植物（魚類、甲殻類）に影響を及ぼすとされている除草剤を除いたものとするなど、魚にやさしい田んぼでつくられたお米を「魚のゆりかご水田米」として認証しています。



○栗見出在家町さかなのゆりかご水田協議会

東近江市の栗見出在家町さかなのゆりかご水田協議会では、かつての豊かな田園風景を取り戻すことを目的に、住民が心をひとつにして活動できるまちづくりの象徴的な取組として、さかなのゆりかご水田づくりを推進しています。

農家も非農家も皆で、琵琶湖から水田へと魚が遡上するための魚道の設置をしたり、地元の子どもたちと共に、田植え・稲刈りの体験、田んぼの生きもの観察会や地元の食材を利用した青空食堂などの催しを通じて、地産地消の食農教育や環境教育を実践しています。この他にも、市民・大学・企業等からの水田オーナーの募集や首都圏の中学生への農作業体験の提供、酒造メーカーと連携した農業の6次産業化等の活動を行っています。

これらの活動に取り組みながら、琵琶湖の水産資源の保全や地域住民の環境保全意識向上にもつながる「魚のゆりかご水田米」を生産しています。今後も地域資源や伝統を守るとともに、取組の理念などを次世代に確かな形で継承していきたいと考えています。

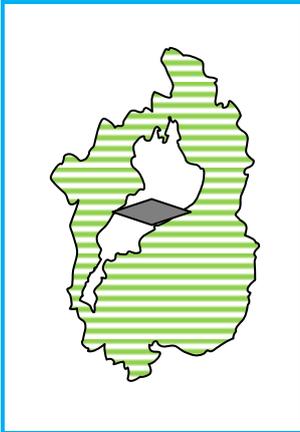


魚道設置の様子

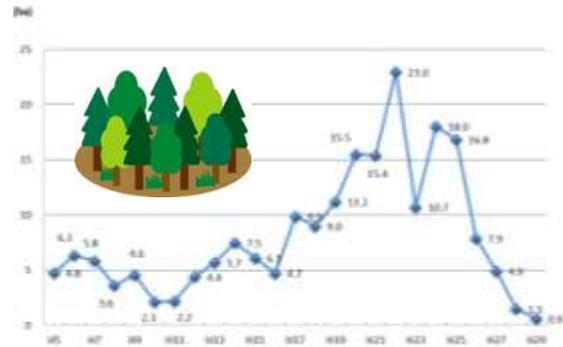
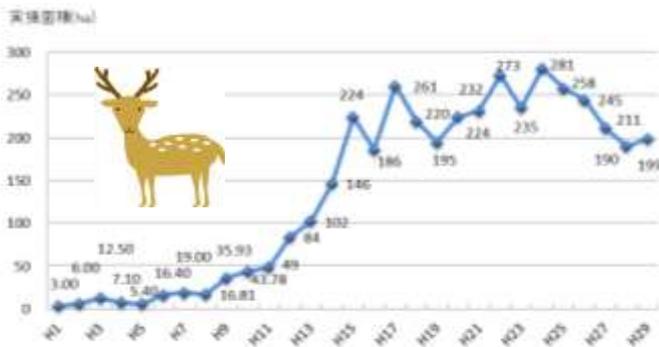


森林の状況

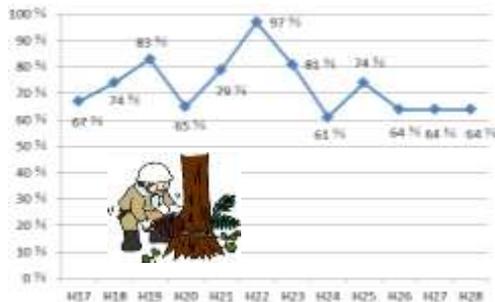
関連するアウトカム指標：除間伐を必要とする人工林に対する整備割合、森林づくり活動を実践している市民団体等の数、森林づくり活動をPRする森づくり団体数、地域の森林づくりを推進する集落数、シカによる林業被害面積、ナラ枯れ被害面積



平成 12 年頃から二ホンジカによる林業被害が急激に増加し、スギやヒノキなどの人工林の苗木の食害や剥皮被害が深刻な問題になっています。広葉樹林においても、二ホンジカの食害により、下層植生の衰退が見られます。ナラ枯れ被害は減少傾向ですが、森林の下層植生が衰退することで、生物多様性への影響や土砂の流出などが懸念される状況となっています。除間伐を必要とする人工林に対する整備割合は、林地境界の明確化等に多くの時間と労力を要し、目標を達成していませんが、県産材の素材生産量は、木材流通センターを核とした木材流通体制の構築の結果、近年においては増加傾向となっています。県産材を活用することは、森林資源の循環を活発にし、健全な森林整備につながります。

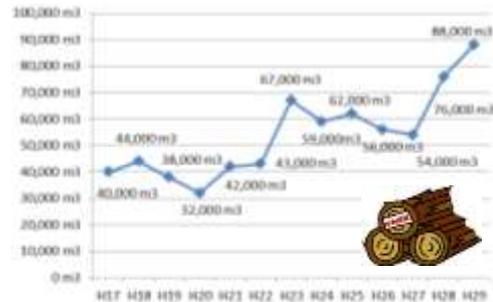


二ホンジカによる林業被害面積



除間伐を必要とする人工林に対する整備割合

ナラ枯れ被害面積



県産材の素材生産量

★ 関連情報

○滋賀県水源森林地域保全条例について

県土の約 6 分の 1 を占める琵琶湖を、その 3 倍の広さの森林が育んでいます。森林は、水源涵養機能など多面的な機能を有し、水資源の保全という観点からも大変重要です。

琵琶湖と人々の暮らしを支えるかけがえのない滋賀の水源林を健全な姿で適正に保全していくために、「滋賀県水源森林地域保全条例」を制定しました。この条例により、平成 28 年 1 月から水源森林地域内で土地取引などを行う場合は、知事あてに事前届出が必要となりました。



★ 関連情報・取組

○森に人が関われば生物多様性は維持できる（山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会 藤本秀弘）

人が森に関わらなくなって久しい。倒木・落枝が林床を埋め、下草が被い茂っていた森の緑はシカに食い尽くされ、表土は大雨毎に下流に押し流され、災害にもつながる状態が県下の山地に広がっています。遠目には緑豊かに見える森も、ひとたび中に入ると荒れ果てた森の状態に目を見張ります。シカが食い尽くした緑の跡には、外来種がはびこり在来種を追いやっています。こうした山地の荒廃は、「碧くすんだ琵琶湖」のイメージを損なう元凶です。

こんな荒廃を何とか食い止めたいと「奥びわ湖・山門水源の森」では、生物多様性の保全（琵琶湖の源流の健全な生態系を保全する）を守るため、日々森の状態を観察し必要な保全作業を実施することで多様性を維持しています。森に必要な保全作業は多種多様ですが、それは森を観ることから始めています。



毎年の草刈り・播種で増えるササユリ



防獣ネット設置で希少種を守る

○東近江市でのエコツーリズム推進について（東近江市森と水政策課）

東近江市では、豊かな自然環境や歴史文化を活用し、その価値についての気づきを与え、更には資源に対する保全意識を高めるエコツーリズムに取り組むことで、人と自然のつながり再生をめざしています。

平成 27 年の市制 10 周年にあたり鈴鹿山脈の数ある山峰から選定した「鈴鹿 10 座」の保全・活用プラン策定や、「東近江市エコツーリズム推進協議会」による多様な主体との協働によってエコツーリズムを推進しています。

これらを通じて育んだ東近江ならではのエコツーリズムを、ぜひ多くの方に体験していただきたいと考えています。





R

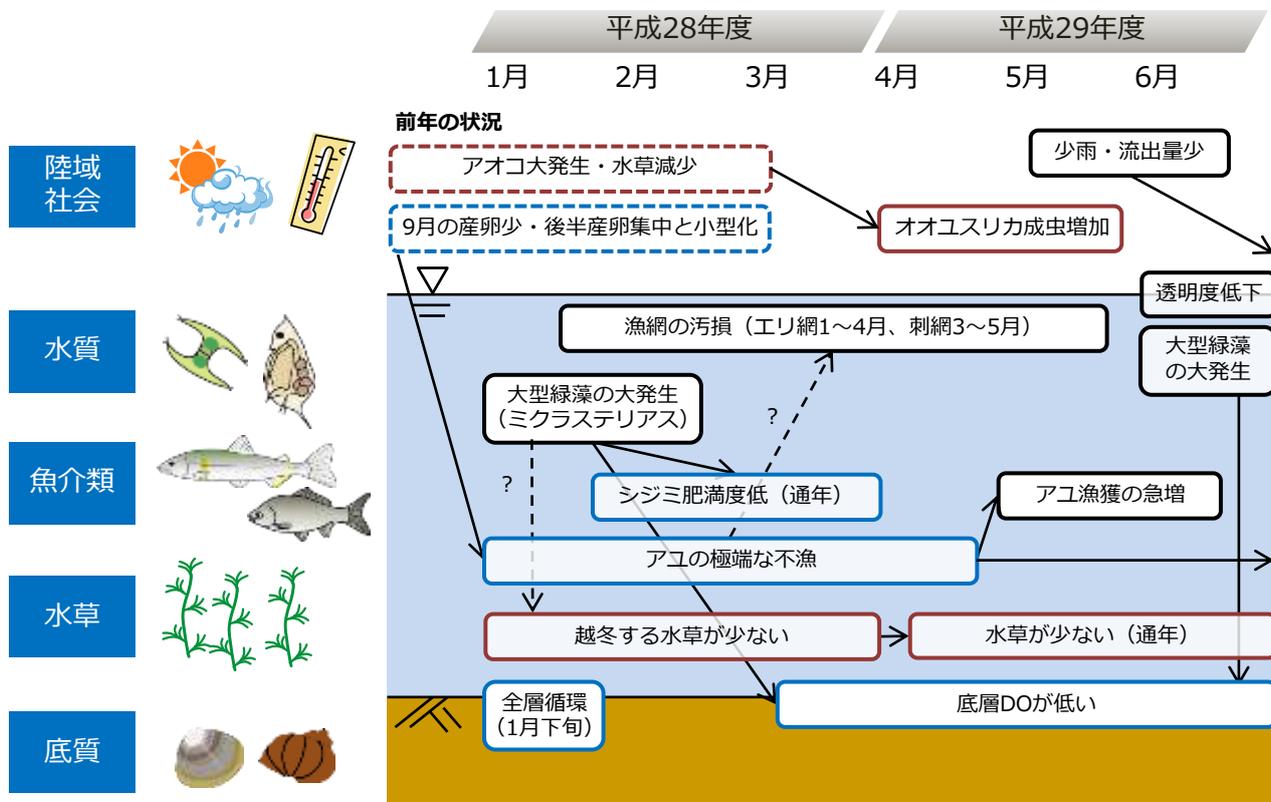
elationship between Indicators

指標間の関係性

- ・平成 29 年度に琵琶湖で生じた主な事象間の関係性
- ・平成 29 年度の琵琶湖における物質収支の概況
- ・琵琶湖とその流域で生じた主な事象の年表
- ・指標一覧および関係性の全体像

平成 29 年度に琵琶湖で生じた事象間の関係性

(「魚たちのにぎわいを協働で復活させるプロジェクト」チームの成果等より)



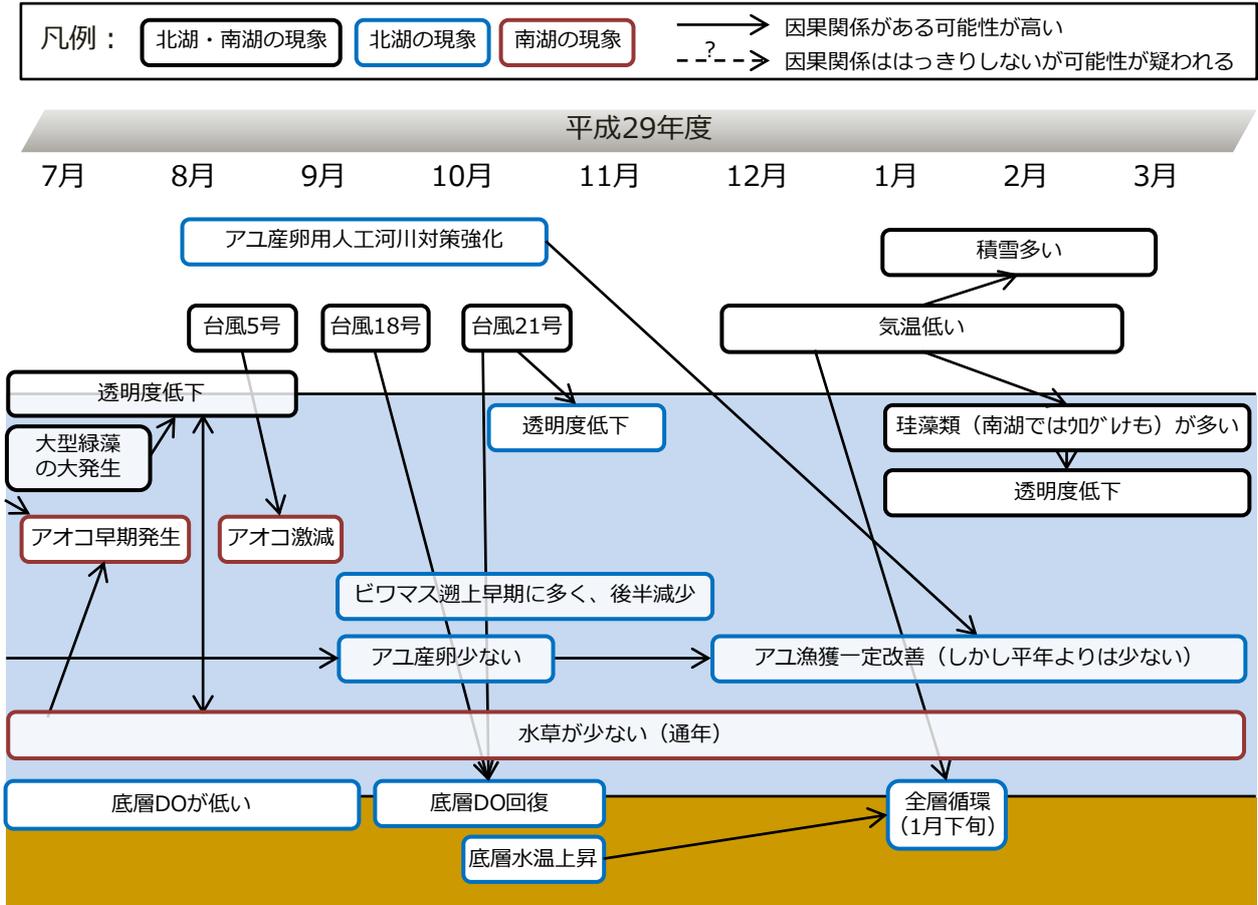
※この模式図は、琵琶湖の状況について関係者の意見等を整理したものであり、各事象間の関連性について科学的に実証されたものではありません。

滋賀県では、琵琶湖の生態系のバランスを是正し、本来の在来魚介類のにぎわいを復活させるため、行政、事業者の枠をこえた「魚たちのにぎわいを協働で復活させるプロジェクト」チームを結成し、琵琶湖で生じた現象の把握や課題の整理を行っています。本プロジェクトチームで議論した内容を踏まえ、平成 29 年度に琵琶湖で生じた事象間の関係性を時系列に沿ってまとめました。なお、このまとめは学術的な検証を得ていない結果を含んでいることにご注意ください。

平成 28 年 12 月から翌年 4 月下旬にかけてアユが記録的な不漁に陥り、大きな問題になりました。この原因の解明が県や研究機関によって進められ、現時点では、平成 28 年度は通常 9 月中であるアユのふ化が 10 月以降に遅れるとともに、一時期に集中したことによる密度効果などにより、著しく成長が遅れたためであると考えられています。今後も引き続き環境面など広い視点を含め、検証等が必要です。4 月末以降はアユの漁獲量が急増しましたが、最終的には平年の 1/3 程度であったと推測されます。平成 29 年度冬季は、アユ産卵用人工河川の対策の強化などにより、平年並みとはいかないものの、前年に比べて漁獲は一定改善しています。しかし、秋季の天然河川の産卵量が平年の 2.5% と非常に少ないため、後期の漁獲が伸びないことが心配されています。

平成 29 年は、1～2 月および 6～7 月の大型緑藻の増加、10 月の台風 21 号、1～3 月の珪藻の増加等により、年間を通じて透明度の低い状態が続きました。その結果、南湖では水草が少なく、また水草が少ないことが植物プランクトンの増殖に拍車をかけたと考えられます。水草の減少と 5～6 月の少雨が相まって、観測史上最も早い時期（7 月 21 日）に南湖でアオコが確認されましたが、8 月の台風以降はほとんど見られなくなりました。

北湖では増殖した植物プランクトンが沈降し、湖底で分解され酸素を消費したことで、底層の溶存酸素濃度（DO）が過年度と比較して非常に低い状態で推移しました。しかし、8～10 月にかけて台風が 3 度も来襲し、湖水がかき混ぜられることで底層 DO が回復し、湖底が無酸素状況（0mg/L）に至ることはありませんでした。また、台風により底層の水温が上昇したのにあわせ、冬に気温が低い状態が続いたことから、過去 10 年では最も早い 1 月 22 日に全層循環を確認しました。



外壁に群がるオオユスリカ (4月)



台風21号の影響で濁った琵琶湖 (10月)



大型緑藻スタウラスツルム



烏丸半島北側で確認されたアオコ (7月)

平成 29 年度の琵琶湖における物質収支の概況

これまで、琵琶湖とその流域の環境保全のために、水は水、植物は植物、魚は魚、というように個別に捉えて対策を取ることがほとんどでした。しかしいうまでもなく、水も動植物も私たちの社会もつながり、関わり合いながら存在しています。冒頭の評価結果でみたように、**いま琵琶湖とその流域が抱える問題の本質は、個別の要素ではなくそのつながりの中にある**と考えられます。

これからは、**水質や漁獲量、水草などの個別の指標を眺めるだけではなく、それぞれがどのように影響しているのかという指標間の関係性についてもあわせて把握することが必要**です。

その第一歩として、水草群落であれば面積 (ha)、漁獲量であれば年間に漁獲される魚介類の量 (t/年)、水質であれば全有機炭素 (TOC) やリン等の濃度 (mg/L) というように、異なる物差し (単位) でまとめられている指標を、統一的な観点から取りまとめることを試みました。

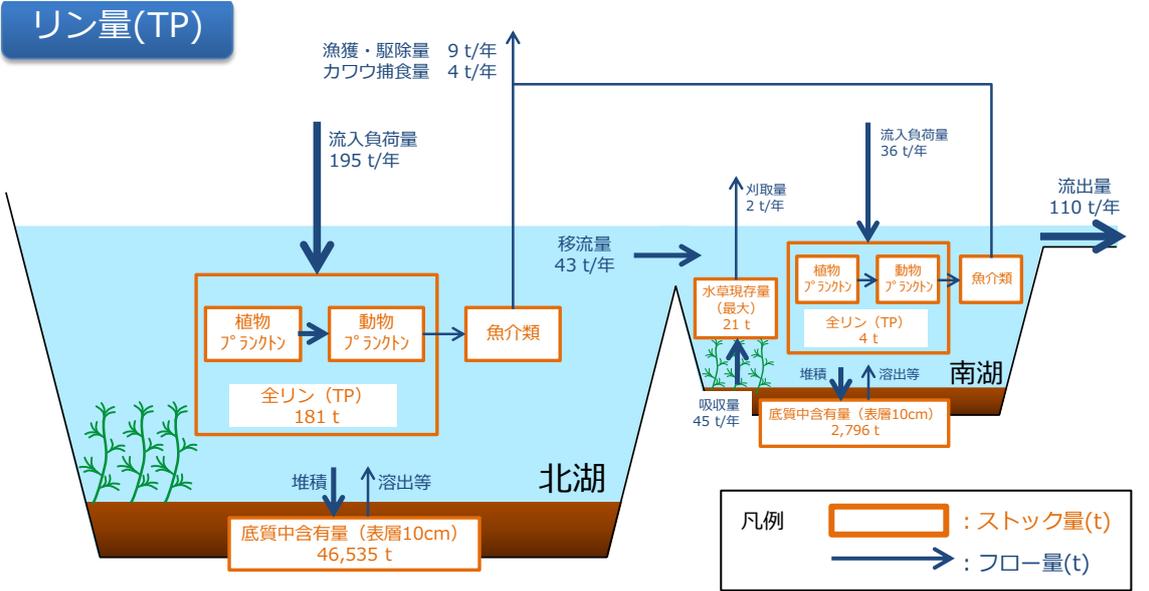
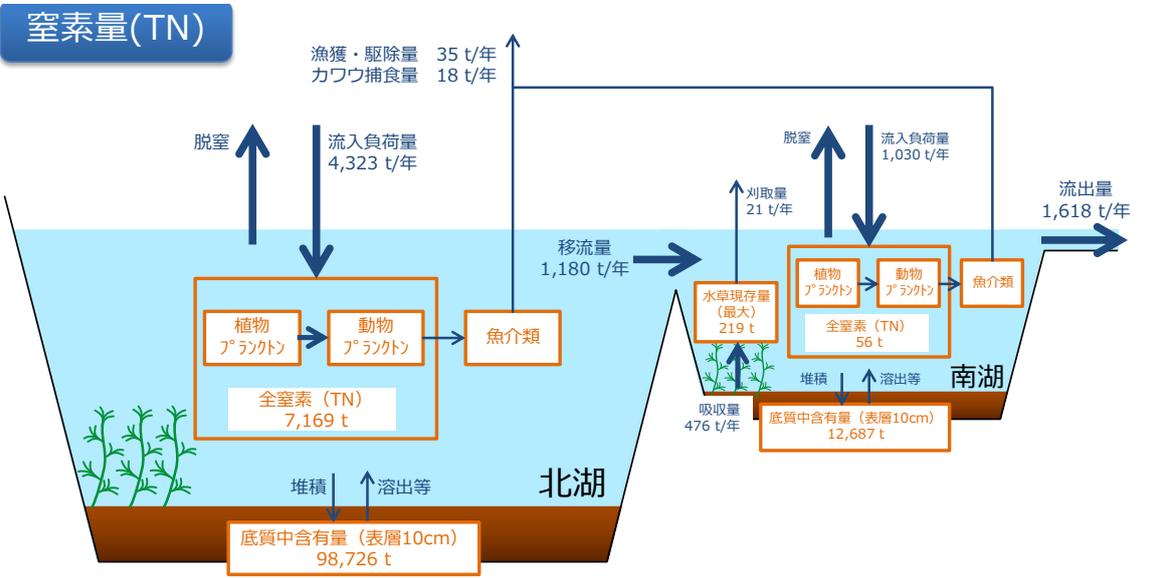
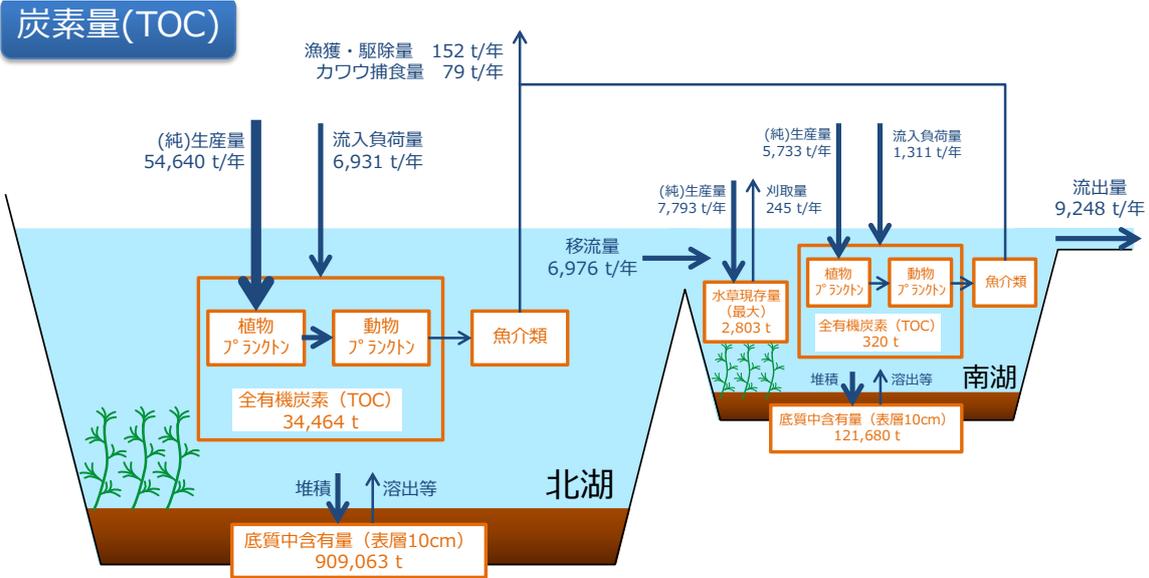
- 琵琶湖での食物連鎖によって、水質から水草、プランクトン、魚介類とつながり、また食材として暮らしに取り込まれ、その後琵琶湖に戻る物質のうち「炭素」「窒素」「リン」の重さに着目しました。
- これらの物質が「**そこにどれだけあるのか**」という**存在量 (ストック)**、および例えば「**炭素が植物にどれくらい取り込まれたか**」といった**移行量 (フロー)**を明らかにする調査を開始しています。
- これらの調査によって、**琵琶湖と暮らしのつながりの中で、特に影響の大きな要素は何なのか、どこが改善へのボトルネックになっているのかなどを理解し、優先的に取り組むべき今後の課題や方向性が見えてくると期待**しています。

これまでの結果を次ページに示します。まずストックに着目します。特筆すべきは水草の影響です。水草は夏季には大きな現存量を有し、特に南湖では水中に存在する物質質量よりも数倍～10 倍程度の量のあることが分かります。底質中にも 10cm ほどの深さに多量の物質が含まれていることが分かります。

一方フローについては、調査や研究の蓄積が少なく、不明確なものが多くあります。しかしこれまでに、炭素量については、植物プランクトンや水草による一次生産、および呼吸や分解の影響が非常に大きく、年間数万 t～それ以上であることが分かっています。窒素量については、流入した負荷量が脱窒により年間数千 t 程度減少しながら移流または流出するというのが支配的な物質収支となっています。リン量については、流入した負荷量が湖底への堆積という形で年間 100t からそれ以上程度除去され、移流または流出しています。一方で県外からは肥料、家畜飼料等として 1 年間にリンが 3,000t 近く持ち込まれているという試算結果もあり (永禮、2015)、私たちの暮らしが流域の物質循環に与える影響の大きさが示唆されます。

このように、琵琶湖で生じていることを同じ物差しで比べてみることで、何が問題なのか、また今後どのような対策が必要なのか等を考える一つのきっかけが得られます。

ただし以上の数値は、現時点では十分な科学的検証を得たものではなく、あくまで概算に基づくものであることに注意してください。データには様々な精度のものが混在しています。今後各種データや考え方を見直したり、流域社会に関することにも拡張したりするなど、精査を行っていきます。



凡例 : ストック量(t)
→ : フロー量(t)

【参考】物質収支の計算方法

※ 下線の指標については、マザーレイク 21 計画として整理された指標値を使用

※ 【 】内の年度は計算の対象年度を示す

○ 流入負荷量【平成 27 年度】

第 7 期湖沼水質保全計画において原単位法を用いて計算¹⁾

○ 植物プランクトン一次生産量【平成 27 年度】

第 7 期湖沼水質保全計画において「琵琶湖流域水物質循環モデル」を用いて計算¹⁾

○ 水草現存量・生産量・吸収量【平成 29 年度】

琵琶湖南湖において「水草消長モデル」を用いて計算²⁾

○ 水草除去量（表層刈り取り+根こそぎ除去）【平成 29 年度】

統計値から以下の換算式により計算³⁾

除去量 (t/年) × 湿重から乾重への換算 (0.1) × 含有量 (C:0.381; N:0.032; P:0.003g/g-dry)

○ 底質中含有量【平成 23~25 年度】

統計値から以下の換算式により計算^{4,5)}

底質含有量 (g/g-dry) × 面積 × 対象深さ (10cm) × (1 - 空隙率 (0.3)) × 粒子密度 (2.5g/cm³)

○ 物質量【平成 29 年度】

統計値から以下の換算式により計算

全観測地点における濃度年平均値 (北湖・南湖別) × 水容量

※ 北湖については表水層と深水層 (水深 40m データで代用) に区分して計算後、合算

○ 物質移流量【平成 29 年度】

統計値から以下の換算式により計算

全観測地点における濃度年平均値 (北湖・南湖別) × 年間移流量

※流域平均降水量、放流量 (以上、琵琶湖河川事務所)、蒸発量 (推定) から水収支により計算

○ 在来魚漁獲量【平成 28 年度】・外来魚の駆除・回収量【平成 29 年度】

統計値から以下の換算式により計算⁶⁾

漁獲・駆除・回収量 (t/年) × 湿重から乾重への換算 (0.3) × 含有量 (C:0.455; N:0.103; P:0.0241g/g-dry)

○ カワウ補食量【平成 29 年度】

統計値から以下の換算式により計算⁶⁾

生息数 (羽) × 補食量 (350g/羽・日) × 対象期間 (3-9 月) × 湿重から乾重への換算 (0.3) × 含有量 (C:0.455; N:0.103; P:0.0241g/g-dry)

参考文献

1) 滋賀県琵琶湖環境科学研究センター (2016) 第 7 期湖沼水質保全計画に係る将来水質予測シミュレーションについて、滋賀県環境審議会水・土壌・大気部会 (平成 28 年 11 月 21 日開催)、

http://www.pref.shiga.lg.jp/shingikai/biwako_mizukankyoku/20161121.html

2) 佐藤祐一ら (2016) 琵琶湖南湖における水草消長モデルの構築とシナリオ解析、日本陸水学会第 81 回大会講演要旨集、70



- 3) 早川和秀ら（2012）琵琶湖環境科学研究センター研究報告書、7、103-112
- 4) 琵琶湖環境科学研究センター（2015）琵琶湖底質調査報告書（平成 23～25 年度）、
<http://www.pref.shiga.lg.jp/d/biwako-kankyo/lberi/03yomu/03-01kankoubutsu/files/biwakokoteityousahoukokusyoh23h25saisyu.pdf>
- 5) 横田喜一郎（1997）琵琶湖研究所所報、14、24-29
- 6) 早川和秀ら（2011）琵琶湖環境科学研究センター研究報告書、6、58-69

琵琶湖とその流域で生じた主な事象の年表

様々な事象がどのように関連しているのかを理解する上で、これまでいつ、どこで、どのようなことが生じてきたのかを理解しておくことが重要となります。次ページには、「水質」「魚介類」「動植物」「社会」の4つの分野に関連して、昭和30年（1955年）頃以降に生じた主な事象を年表形式でまとめました。なお、本年表は必ずしも正確な年次を表すものではなく、また「魚たちのにぎわいを協働で復活させるプロジェクト」関係者の経験や記憶を元に記載している事項もあるため、琵琶湖とその流域における歴史を大まかに理解するための資料と捉えてください。

全体を大きく見ると、貝類や河川の魚類に異変が生じ始めるのが1960年代～70年代、淡水赤潮等の富栄養化が問題となるのは1970年代後半～90年代、琵琶湖の魚類相が大きく変わるのが1980～90年代、水草の異常繁茂が問題となるのは1990年代以降という捉え方ができるでしょう。これらの因果関係を解き明かすことが、今後の保全・再生の方向性を見いだすヒントになるかもしれません。

★ 関連情報

○赤潮の顕在化

1977年5月、琵琶湖に淡水赤潮が発生し、その原因の一つが合成洗剤に含まれているりんに起因することが分かると、県民の間に合成洗剤の使用をやめ、粉石けんを使おうという運動が起こりました。これが、いわゆる「石けん運動」です。

琵琶湖を守るため、粉石けんを使おうといううねりの中で、早急に実行性のある対策を講じるよう求める県民の声を受け、りんを含む家庭用合成洗剤の販売・使用・贈答の禁止、窒素やりん工場排水規制を盛り込んだ「滋賀県琵琶湖の富栄養化の防止に関する条例」（通称：琵琶湖条例）が制定され、1980年7月に施行されました。石けん運動に表れた県民の思いが条例として実を結んだことは、本県の環境行政の歴史に残る出来事です。

この条例が施行された7月1日は「びわ湖の日」と定められ、一斉清掃をはじめとした、環境の保全についての理解と認識を深める活動が行われています。また本年度は「びわ湖の日」から8月11日の「山の日」までを「びわ活」期間とし、「この夏！びわ活！」をキャッチフレーズに多様な主体による取組が、オール滋賀で行われました。

○琵琶湖保全再生法・琵琶湖保全再生計画について

平成27年9月に、琵琶湖を「国民的資産」と位置付ける「琵琶湖の保全及び再生に関する法律」が公布・施行されました。これを受けて県では、平成29年3月に、琵琶湖と人とのより良い共生関係の形成を目指す「琵琶湖保全再生施策に関する計画」を策定しました。

この計画では、水質汚濁防止や水源涵養、生態系の保全再生、景観整備、産業振興や研究開発、教育の充実など琵琶湖の保全再生に向け、琵琶湖の水質のみではなく幅広い取組について決めました。

また、多様な主体の参画について規定し、過去の琵琶湖の富栄養化に対する反省のもと、琵琶湖の集水域全体で、事業者や消費者、企業等の琵琶湖に係わる多様な主体が参画することにより、琵琶湖の保全再生を図ることを定めています。具体的には、漁業者と行政が一体となった外来魚対策や、農業者が行政とともに実施する地域独自の環境保全型農業など多様な主体の参加・協力により、琵琶湖の保全再生にかかる施策を総合的に推進しています。



琵琶湖とその流域で生じた主な事象の年表

項目	1955 昭和30	1960 昭和35	1970 昭和45	1980 昭和55	1990 平成2	2000 平成12	2010 平成22
水質	有機物・窒素・リン			琵琶湖のTP濃度が低下 BODが減少する一方でCODが上昇(BODとCODの乖離)	琵琶湖のTP濃度が低下	琵琶湖のTN濃度が低下	
	プランクトン		水道でカビ臭	赤潮の顕在化	アオコの顕在化 ヒコプランクトン(非常に小さなプランクトン)が異常発生 網付着物の増加	アオコ過去最多 藍藻類の増加	アオコ過去最多 ミクラステリアス大発生
魚介類	湖底					全層循環の遅れ 湖底のDO過去最低を記録	全層循環の遅れ
	琵琶湖			シジミの減少 イカサコ貝の減少 オオクチバス初確認	オオクチバスの増加 アユの増加 フナ類の減少 ブルーギルの増加 ブルーギルの減少 ホンモロコシの減少 ワカサギの台頭		アユ急減 アユ急増によるアユ大量死
動植物	河川			田んぼに登る魚の減少	川に生息する魚の減少		
	水草				ヨシ帯の減少	南湖で水草の大量繁茂 赤野井湾におけるハスの増加	ハス消失 オオバナナミスズキの増加
鳥類等							
	カワウ				カワウの急増	シガによる越冬の増加 ユズリカの激減	
社会・気象	気象						
	気象				気温の顕著な上昇	洪水による水位低下(BSL-123cm)	
開発・改修等	内湖干拓の推進						
	琵琶湖総合開発事業 圃場整備の推進						
暮らし	上水道の普及推進						
	川で遊ぶ子どもが魚取りをする人たちの減少 下水道の普及推進						

指標一覧および関係性の全体像

マザーレイク 21 計画で挙げられた指標の一覧および関係性の全体像を以下に示します。琵琶湖と暮らしに関わる指標の間には様々な関係があるため、ある指標の改善（悪化）が別の指標の改善（悪化）につながることも多くあります。それらの直接・間接的な関係を理解して、琵琶湖と暮らしにおける根本的な問題に気づく一助としてご活用ください。

1. 琵琶湖流域生態系の保全・再生		2. 暮らしと湖の関わりの再生	
<p>(1)湖内</p> <p>環境・社会の状態に関する指標(アウトカム指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> * 琵琶湖の透明度 * 琵琶湖の水質 (環境基準項目のほか難分解性有機物に関する項目、底層のD.Oなどを含む) * アオコの発生日数、水域数 * 淡水赤潮の発生日数、水域数 * 珪藻網が優先する比率 * 琵琶湖の底質調査 (強熱減量) * 琵琶湖漁業の漁獲量 (外来魚を除く) * ニゴロブナの漁獲量 * セタシジミの漁獲量 * ホンモロコの漁獲量 アユの漁獲量 * ビワマスの漁獲量 ニゴロブナ当歳魚資源尾数 * セタシジミの主要漁場における生息密度の推移 * 外来魚生息量 (4/1調査) * 希少野生脊椎動物種・貝類 <p>主な施策の進捗状況に関する指標 (アウトプット指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> * 下水道を利用できる県民の割合 汚水処理施設整備率 * 水稲における環境こだわり農産物栽培面積の割合 流域単位での農業排水対策の取組面積 ニゴロブナの種苗放流尾数 ホンモロコの種苗放流尾数 セタシジミの種苗放流個数 	<p>(3)集水域</p> <p>環境・社会の状態に関する指標(アウトカム指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> * 県内主要河川の水質目標の達成率 県内河川の水質 (BOD) 県内河川の水質 (T-N) 県内河川の水質 (T-P) * 流入汚濁負荷推定量 * 除間伐を必要とする人工林に対する整備割合 森林づくり活動を実践している市民団体等の数 (累計) 森林づくり活動をPRする森づくり団体数 (累計) 地域の森林づくりを推進する集落数 (累計) * ニホンジカによる林業被害面積 * ナラ枯れ被害面積 耕作放棄地面積 ニホンジカの推定生息頭数 カワウの推定生息数 (再掲) * 希少野生脊椎動物種・貝類 (再掲) * 化学合成農薬の使用量 (H12比) ホテル飛翔地域数 (守山市赤野井湾) <p>主な施策の進捗状況に関する指標 (アウトプット指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> 里山整備協定林の数 (累計) 協定を締結して整備する里山の箇所数 (累計) 間伐実施面積 利用間伐実施面積 * 水稲における環境こだわり農産物栽培面積の割合 (再掲) * 「魚のゆりかご水田」など豊かな生き物を育む水田取組面積 	<p>(1)個人・家庭</p> <p>環境・社会の状態に関する指標(アウトカム指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> 県内卸売市場の県産野菜入荷率 * 月1回以上湖魚料理を作り、食べる人の割合 県民1人が1日に出すごみの量 * 家庭排水に気を付ける家庭の割合 * 過去1年間に環境保全活動や環境学習に参加した人の割合 * 過去1年間に琵琶湖や川で遊んだ人の割合 環境こだわり農産物を継続して利用する消費者の割合 <p>主な施策の進捗状況に関する指標 (アウトプット指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「みるエコおらみ」プログラム取組世帯数 びわ湖まちかどむらかど環境整備地区数 	<p>(2)企業 (なりわい)</p> <p>環境・社会の状態に関する指標(アウトカム指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> * 県産材の素材生産量 新規就業者数 (H23~H27累計) * 琵琶湖漁業の漁獲量 (外来魚を除く) (再掲) * ニゴロブナの漁獲量 (再掲) * セタシジミの漁獲量 (再掲) * ホンモロコの漁獲量 (再掲) アユの漁獲量 (再掲) * ビワマスの漁獲量 (再掲) ニゴロブナ当歳魚資源尾数 (再掲) * セタシジミの主要漁場における生息密度の推移 (再掲) * 漁業就業者数 * 琵琶湖漁業の生産額 * 農業就業人口 (販売農家) * 農業産出額 * 林業就業者数 * 林業産出額 <p>主な施策の進捗状況に関する指標 (アウトプット指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> 琵琶湖森林づくりパートナー協定 (企業の森) 締結数 (累計) 「おいしが られしが」キャンペーン登録店舗数 * 水稲における環境こだわり農産物栽培面積の割合 (再掲) * 「魚のゆりかご水田」など豊かな生き物を育む水田取組面積 (再掲) びわ湖環境ビジネスメッセにおける有効商談件数 (累計) 環境こだわり農産物認証マークを表示して出荷する生産組織数 水田ハローによる浅水代かきの実施率 耕地面積 利用間伐実施面積 (再掲)
<p>(2)湖辺域</p> <p>環境・社会の状態に関する指標(アウトカム指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> * 琵琶湖のヨシの面積 琵琶湖の水浴場の「快適」ランクの箇所数 * 琵琶湖漁業の漁獲量 (外来魚を除く) (再掲) * ニゴロブナの漁獲量 (再掲) * セタシジミの漁獲量 (再掲) * ホンモロコの漁獲量 (再掲) アユの漁獲量 (再掲) * ビワマスの漁獲量 (再掲) ニゴロブナ当歳魚資源尾数 (再掲) * セタシジミの主要漁場における生息密度の推移 (再掲) プレジャーボートによる騒音被害に関する苦情件数 * 外来魚生息量 (再掲) (4/1調査) カイツブリの推定生息数 カワウの推定生息数 * 希少野生脊椎動物種・貝類 (再掲) 希少野生動物種の「生息・生育地保護区」の箇所数 * 水草群落面積 <p>主な施策の進捗状況に関する指標 (アウトプット指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> * 水草表層刈り取り量 * 水草根こそぎ除去面積 砂地造成累積面積 ヨシの植栽面積 (累計) 砂浜保全対策 (累計) 外来魚の駆除量・回収量 ニゴロブナの種苗放流尾数 (再掲) ホンモロコの種苗放流尾数 (再掲) セタシジミの種苗放流個数 (再掲) 	<p>《つながりへの配慮》</p> <p>環境・社会の状態に関する指標(アウトカム指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> アユの漁獲量 (再掲) * ビワマスの漁獲量 (再掲) * ニゴロブナの漁獲量 (再掲) ニゴロブナ当歳魚資源尾数 (再掲) * セタシジミの主要漁場における生息密度の推移 (再掲) <p>主な施策の進捗状況に関する指標 (アウトプット指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> * 「魚のゆりかご水田」など豊かな生き物を育む水田取組面積 (再掲) 	<p>(3)地域</p> <p>環境・社会の状態に関する指標(アウトカム指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「環境の保全を図る活動」を活動分野とするNPO法人の数 森林づくり活動を実践している市民団体等の数 (累計) (再掲) 森林づくり活動をPRする森づくり団体数 (累計) 地域の森林づくりを推進する集落数 (累計) (再掲) <p>主な施策の進捗状況に関する指標 (アウトプット指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> マザーレイクフォーラムへの参加団体数 淡海の川づくりフォーラムへの参加団体数 びわ湖まちかどむらかど環境整備地区数 (再掲) 	<p>《つながりへの配慮》</p> <p>環境・社会の状態に関する指標(アウトカム指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校給食への地産物利用率 (食材ベース) びわ湖フーディングスクール「らみのこ」事業実施学校数 森林環境学習「やまのこ」事業実施学校数 「たんほのこ」体験事業実施学校数 琵琶湖博物館の年間来館者数 * 過去1年間に琵琶湖や川で遊んだ人の割合 (再掲) びわこルールキッズの登録者数 * 自分の住む地域の洪水ハザードマップを知っている人の割合 <p>主な施策の進捗状況に関する指標 (アウトプット指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> マザーレイクフォーラムへの参加団体数 (再掲) 淡海の川づくりフォーラムへの参加団体数 (再掲) びわ湖まちかどむらかど環境整備地区数 (再掲) 環境学習企画サポート件数 (累計) 滋賀県学習情報提供システム「におネット」における講座情報数 森林環境学習の年間受講者数

*: 「琵琶湖と暮らし2016」に図表を掲載した指標

